奈良教育大学

令和５年度　陸前高田市文化遺産調査報告書

令和６年３月

奈良教育大学 ESD・SDGs センター

はじめに

奈良教育大学 学長　宮下 俊也

奈良教育大学の学生及び教員による「陸前高田市文化遺産調査」は、陸前高田市の一市民から文化庁に寄せられた、東日本大震災による被災を免れた陸前高田市の文化遺産に対する調査依頼がきっかけとなり、本学の山岸公基教授を中心に仏像調査をさせていただいたことから始まっています。コロナ禍による中止があったものの、昨年度までに実質９回の調査活動が重ねられてきました。

本年度は、９月３日～６日にかけて５名の学生が参加しましたが、山岸教授のご都合により、観音寺で予定していた文化遺産調査を取りやめ、急遽、参加者学生全員と大西浩明准教授が１つのチームとなり、「ESD防災班」として調査・研究を行ってくれました。

嬉しいことは、このESD防災班が、現地での体験を自分たちの学びだけに留めるのではなく、それを活かした「防災プロジェクト」として、小学校６年生の総合的な学習の時間のためのプログラム『自分の周りで災害発生！？ 自分も地域も守れる防災マイスターになろう！』を開発してくれたことです。教師を目指す学生が、まだ大きな災害に遭った経験がない奈良市の小学生のために、「いつかは来るかもしれない」という意識を持たせ、自分や周囲の人々の命を守るとともに、災害に強い地域づくりに貢献するための理解や行動力を身に付けさせようとしたことは、本当に素晴らしいことです。しかも、奈良市に留まらず、全国に発信するため、論文にまとめて発表してくれました。

まさか、元日に大地震や津波が起きるとは思わなかった能登半島地震。そこで奪われた多くの尊い人命、財産、くらし、文化、伝統、美しい風景…。そのことを、誰もが自分ごととして捉えることは、そんなに容易いことではないかもしれません。だからこそ、防災・減災のための教育、とりわけESDが重要なことは言うまでもありません。

持続可能な社会を創造していくためには、すべての人々の意識と行動が変革し、これまでの価値観を変容していくことが必要で、それはESDの主眼でもあります。あらためて、ESDの推進大学である奈良教育大学から、この「防災プロジェクト」のような取組が数多く生まれることを期待します。全国、そして世界において次代を担うすべての子どもたちのために…。

令和６年３月

目　次

はじめに …… 1

令和５年度　陸前高田市文化遺産調査概要報告 …… 3

陸前高田市防災教育研修　大竹玲央 …… 13

陸前高田市文化遺産調査団に参加して　櫻木友渚 …… 15

防災・減災教育の大切さ

　―事実を知り、学び、伝えていくことの大切さー　藤本尋巳 …… 17

令和５年度 陸前高田市文化遺産調査に参加して　村島大賀 …… 19

陸前高田市文化遺産調査団に参加して　田中愛花 …… 21

陸前高田市文化遺産調査における ESD 教材開発（11） …… 23

防災プロジェクト学習について …… 28

第６学年音楽科学習指導案　藤本尋巳 …… 30

第６学年理科学習指導案　大竹玲央 …… 33

第６学年国語科学習指導案　田中愛花 …… 39

第６学年社会科・総合的な学習の時間学習指導案　村島大賀 …… 42

第６学年国語（書写）科学習指導案　櫻木友渚 …… 48

令和5年度 陸前高田市文化遺産調査概要報告

ESD・SDGs センター　大西　浩明

1．目的

2011 年の東日本大震災及び大津波により、陸前高田市をはじめとする岩手・宮城・福島三県の太平洋岸は大きな被害を受けた。陸前高田市では市民の約 1 割にあたる人命が失われたほか、市の重要施設が被災し、多くのものを失ってしまった。しかし、幸いにも高台にあった寺の仏像は被災をまぬがれた。この仏像等の文化遺産を調査し、その価値を明確にすることが、陸前高田市や周辺市町村の市民を元気づけることになると考え、2012 年度より 9 回にわたって本調査団を派遣してきた(2020 年、2021 年はコロナ禍によって中止)。この間、文化財調査やそれをもとにした教材作成を進めるとともに、被災地の復興状況を視察し、被災された方からの聞き取りやボランティア活動などを通して、ESD の理念に基づいた防災教育に資する教材作成を行うなど、大きな成果を得てきた。本年度は、これまでの成果をさらに深めるため、本調査団を組織し実施する。

※なお、参加予定であった美術教育講座の山岸公基教授が体調不良のため不参加となり、観音寺で予定していた文化遺産調査は実施できず、ESD 防災に関する調査・研究のみを実施した。

2．実施日　　令和 5 年 9 月 3 日（日）～6 日（水）

3．参加者　　学部生　：大竹玲央、櫻木友渚、藤本尋巳、村島大賀、田中愛花

　　大学教員：大西浩明

4．宿泊地　　民宿吉田（陸前高田市米崎町松峰 110-5）

5．日程・活動

9 月 3 日（日）

7:10	伊丹空港南ターミナル（ANA カウンター前）集合
8:00	ANA731
9:15	仙台空港着 →　レンタカー借り上げ
10:00	出発
10:20	雷神山古墳
11:00	名取市震災復興伝承館　【名取市閖上東 1 丁目 1-1】
11:35	多賀城跡・多賀城碑
12:10	東北歴史博物館
16:10	東日本大震災津波伝承館　【陸前高田市気仙町土手影 180】
17:30	民宿吉田着

【雷神山古墳】

東北最大規模を誇る前方後円墳。

主軸 168m、後円部径 96m、高さ 12m、前方部長さ 72m、前端幅 96m、高さ 6m の 3 段築成。

前期古墳の特徴から、4 世紀末から 5 世紀初めと推定され、壷形埴輪や壷形土器が出土していることから、かなり広い地域を統治した地方豪族の首長の墓と考えられている。東北最大というだけあって、ぐるりと一周するだけでひと汗かくほどである。

雷神山古墳の石碑

雷神山古墳の概観

【名取市震災復興伝承館】

津波被害の大きかった閖上地区に 2020 年 5 月に開館。

震災時や復興の様子についての展示等は他の伝承館とも変わらないが、水深 10 ㎝、30 ㎝時の歩く時の体感ができる履物や水圧体感ドアなどがあり、ついやってみたくなる。水深 30 ㎝ともなると、かなりの重さで自由に動けないことがよく分かった。疑似体験するということは大事であることを再確認する。

水の重さと強さを体感する

【多賀城跡・多賀城碑】

古代律令政府により陸奥国の国府が置かれたところで、奈良・平安時代の東北地方の政治・軍事・文化の中心地。多賀城跡の南東約 1 ㎞には、多賀城の付属寺院である多賀城廃寺跡、多賀城跡の南前面には計画的に配置された当時の街並みの跡がある。

現在、正門にあたる南門が復元され、門の両脇に築地塀が建設中で、創建 1300 年の 2024 年度公開を目指しているという。

多賀城碑は日本三古碑の一つで、松尾芭蕉も旅の途中にこの碑を訪れ、深い感動をもって対面した様子が「おくのほそ道」に記されている。

復元整備中の南門と築地塀

【東北歴史博物館】

東北歴史博物館

総合展示室では旧石器時代から近現代までの東北地方全体の歴史を、時代別の 9 つのコーナーに分けて展示している。また詳細展示のコーナーを設け、東北地方の特徴をよく示す 3 つのテーマについて深く掘り下げた展示を行っている。

特別展「古墳をつくる人びと　―はにわ工人, ハジベ君！―」が開催中で、古墳づくりやはにわづくりを楽しく学ぶことができるよう、様々な工夫を凝らして展示されていた。

9月4日（月）

9:30	陸前高田市教育委員会表敬訪問 【陸前高田市高田町字下和野 100】
10:10 13:50	防災クエスト大作戦に参加 東日本大震災津波伝承館見学、陸前高田市内の震災遺構見学 （一本松、タピック４５，旧気仙中学校など）
15:30	気仙大工左官伝承館【陸前高田市小友町茗荷 1－237】
17:00	民宿吉田着

【陸前高田市教育委員会表敬訪問】

山田市雄教育長、細谷勇次教育次長、佐々木敦美文化財係長、松坂泰盛博物館長にご同席いただき、約 30 分表敬訪問をさせていただいた。派遣団員の自己紹介のあと、山田教育長からは、これまでの 11 年間にわたる文化遺産調査等に対して奈良教育大学へ感謝の言葉をいただくとともに、今回の防災教育の調査・研究に大きな成果が得られるようしっかりと学んでほしいという激励をいただいた。佐々木文化財係長からは、「今回は残念ながら文化財調査はできないが、次回はぜひ同行させていただき共に調査にあたらせていただきたい。」旨の申し出があった。

山田教育長より激励の言葉をいただく

終了後、7 階の展望ルームで、細谷次長より市内の被災状況や復興状況などについてご説明いただいた。愛宕山を切り崩し、平均 10ｍのかさ上げをした市街地には、新たな防潮堤が完成し、様々な公共施設も再開したが、なかなか人が戻っていないというお話に、「復興」という言葉の重みを感じずにはいられなかった。

市役所展望ルームにて

【防災クエスト大作戦に参加】

陸前高田のまちなかを歩いて、防災を学びながらまちを楽しむ、体験型のゲームイベントが「防災クエスト大作戦」である。観光案内センターで参加料 500 円を払って問題用紙をもらう。指定された 5 つのポイントへ行き、そこに掲示された指示に従って問題の答えを埋めていくと、ある言葉が浮かび上がる。出揃った 5 つの答えをさらに指示通りに並び替えると、最後の謎解きとなり、最終的に一つの言葉を導き出すという内容であった。

みんなで謎解き！

歩く範囲はそう広くはなく、１時間から１時間半程度で回れるということだったが、一つ一つの問題がなかなか凝ったもので、そう簡単に答えの出るものはなかった。途中、本丸公園に上がる避難路の階段を上ったり、「津波てんでんこ」の言葉が出てきたりと、防災について楽しみながら体感できる内容であった。最後の答えを書いて観光案内センターに持っていくと、市内店舗で使えるクーポンが貰えて、地域の活性化にもつながる取組であると感じた。

【東日本大震災津波伝承館見学】

被災した消防自動車

「歴史をひもとく」「事実を知る」「教訓を学ぶ」「復興を共に進める」という４つのゾーンからなっており、被災した実際の物、被災現場をとらえた写真、被災者の声などを展示しているだけでなく、津波のときの人々の行動をひもとくことで命を守るための教訓を共有しようとしている。特に、人々がそのときどのように考え、どんな行動をとったのかというところに全員が大きな興味をもった。

「３ｍなら大丈夫」、「３階に上がれば大丈夫」といった、それまでの自分の経験から「正常化のバイアス」が働いたであろう人々の言葉が数多くあり、そうならないためにはどのような教育内容が必要なのかを考えさせられる展示が多くあった。

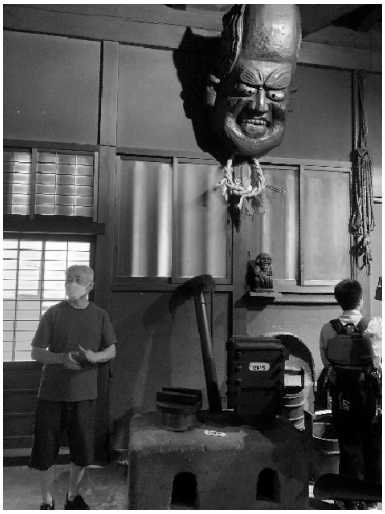
【陸前高田市内の震災遺構見学】

旧気仙中学校

いずれも津波の威力のすさまじさを感じざるを得ない。特に、津波の高さには圧倒される。「道の駅タピック４５」の最上部、気仙中学校の屋上部分まで津波が来たということを、実際に目の当たりにして、そのすごさに改めて恐怖を感じてしまう。

津波伝承館周辺を歩くと、新たに高さ 12.5ｍの防潮堤が完成し、気仙川にも大きな水門が完成している。かさ上げも終わり、町は復興しつつあるが、いかにハード面は整備されても、大切なのは人々がそのときにどのように行動するのかというところの一点である。その意味からも、今回の参加者が取り組もうとしている「自分ごとになる防災・減災教育」というテーマは、どこの地域においても大切な視点であり、汎用性のあるものであると考える。

【気仙大工左官伝承館】



主屋のかまどにて

気仙地方に伝わる大工左官の優れた建築技法を後世に伝えるために建設された。気仙大工とは、気仙地方の大工の集団で、陸前高田市小友町が発祥の地といわれている。気仙大工の足跡は江戸時代にまでさかのぼる。生活を支える目的で、農民が建設関係の仕事につき、独自の技能集団が形成されていった。家だけでなく神社仏閣の建設も手がけ、さらに建具や彫刻までもこなす技量を兼ね備えており、その技術力は全国的に高い評価を得ている。

いわゆる豪農の家を復元したものだそうだが、主屋の柱や梁の太さに圧倒されると同時に、欄間などに施された繊細で美しい細工は思わず見とれてしまうほどである。かまどの上には大きな面が鎮座しており、聞くと「火除けの守り神」だという。気仙地方の人々の習俗の一端がうかがえた。

9月5日（火）

9:30	気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館　　10:00～11:30　語り部ガイド
14:00	講話「防災教育と復興教育について」 　市立図書館長（元小学校長）　菅野稔氏　　@陸前高田市立図書館
15:15	講話「陸前高田市立博物館の再建」 　市立博物館長　松坂泰盛氏　　@陸前高田市立博物館 博物館見学
17:00	民宿吉田着

【気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館】

津波で 4 階まで被災した気仙沼向洋高校旧校舎を「震災遺構」として保存・公開している。当時、向洋高校には生徒・教師・工事関係者約 250 名位がいた。校舎は海から約 150m、海抜は 0～1m位の立地条件下で 13m を超す大津波に襲われながら、臨機応変な迅速避難で誰一人犠牲にならなかった。

熊谷さんのガイドで旧校舎を巡る

この日、語り部ガイドをしてくれたのは、熊谷さんという二十歳の学生さんだった。震災当時は階上小学校の 2 年生、ずっとこの地で育ち、気仙沼向洋高校に入学。在学中に「語り部クラブ」をつくり、卒業後も活動を続けているという。震災当時の教員や関係者に直接当時の話を聞き、「どうしても伝え続けていきたい」という強い思いをもって活動されているようだ。そんな若い彼の思いは、参加した同世代の学生には非常に共感できるものであったようで、積極的にいろいろな質問を投げかけていた。

校舎に突っ込んだ乗用車

散乱したままの教科書

校舎の 4 階に突っ込んでいる乗用車、当時の高校生が使っていた教科書、流れてきたもので傷のついた階段の天井など、当時のままで保存されており、津波の大きさと凄まじさを改めて思い知る。屋上に上ると、最後に残った職員が迫る津波を見てさらに上ったという建屋と、その時に使った生徒用の机があり、出口近くのシアターでは、「天を恨まず」で有名になった階上中学校の梶原裕太くんの答辞がフルバージョンで流れていたり、家族を失った方の回想録などが流れていたりした。

職員が最後に避難した建屋

熊谷さんに、「小学生に対する防災教育で大事なこと」について聞いたところ、「とにかく災害を身近に感じていてほしい。自分は『防災かるた』などで遊びながら大事なことを学んでいたように思う。」と語っていただいた。奈良においても、「防災かるた」などは、自分たちが学んだことを発信したり日常的に防災を意識化したりするには、いい取組ではないかと感じた。

【講話「防災教育と復興教育について」】　陸前高田市立図書館長　菅野稔氏

ご自身の体験から

菅野氏は、住まいは陸前高田ではあるものの、震災当時は西和賀町立川舟小学校に勤務されていた。秋田県境の町で、揺れに伴う大きな被害はあるが津波の心配はなし。教育委員会の帰宅提案で、陸前高田に向かうも、市内に入る段階で道路交通は麻痺。車中泊できるところまで戻り、翌日山間部を辿って何とか市内に入る。高田一中体育館に入り、以後その場所が避難所に。自宅は流され、土台のみ確認する。人事異動内示の修正があり、遠野市立土淵中学校に着任する。遠野は沿岸被災地支援の拠点だった。7月に滝の里工業団地仮設住宅に入居、四畳半二間に大人3人の生活が始まる。

菅野稔氏の講話

その後、陸前高田市立米崎小学校に転任する。米崎小学校は海抜19mの位置にあり校庭への浸水はなく、仮設住宅が建ち並ぶ。被災の状況に温度差があり、支援金や支援物資をどのように分配するかなど悩ましかった。防災教育は最重要課題であり、仮設住宅の住民を巻き込んで避難訓練を実施した。さらに、気仙小学校に転任する。気仙小校区は壊滅状態の地区で全員が被災者である。通常の避難訓練に加え、登校時や帰宅途中での避難訓練も実施した。「想定外」を減らすための日常的な取組を意識した。

陸前高田市内小学校の防災教育・復興教育について

岩手県教育委員会発行の副読本

どの時代であっても、「安全教育」は必須の課題であり、「防災教育」は安全教育の一環として行われるものである。児童等に実践的な防災対応能力を培うことを目的とし、「生き抜く力」を育むことと密接に関連していることから、各学年では教育活動全体を通じて体系的、計画的に防災教育を展開する必要がある。

「いわて復興教育」では、「郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育成するために、各学校の教育活動を通して、3つの教育的価値（いきる・かかわる・そなえる）を育てること」と定義している。また、子どもたちが、「震災津波の教訓を後世に語り継ぎ、自らの生き方・あり方を考え、夢と未来を拓き、社会を創造すること」ができるように、県内すべての学校で取り組むことに大きな意義がある」と示している。各教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動等の教育活動全体を通した学習であり、各教科・領域に横断的に位置付けてカリキュラムを編纂することになる。カリキュラムマネジメントの実際がそこにある。

菅野氏には、市内4小学校の防災教育計画、復興教育計画をご提供いただいた。地域ごとに様々な特徴があり、それに応じた体系的・計画的な学習活動がなされているのがうかがえる。これらを参考にしながら、奈良という地形的にも経験的にも事情の違う地域においては、どのような防災教育が求められるのか、より「自分事」になる小学校での防災教育はどうあるべきなのかなどについて考えていきたい。

【講話「陸前高田市立博物館の再建」】　陸前高田市立博物館長　松坂泰盛氏

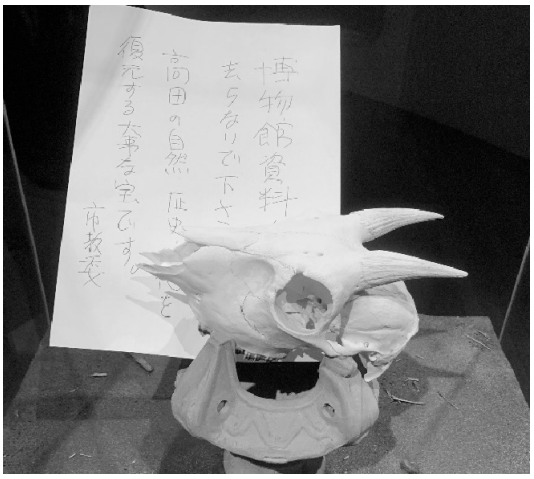
昭和 34 年 1 月に、東北第 1 号の公立博物館として、気仙町旧役場に開館した陸前高田市立博物館は、その後、図書館や「海と貝のミュージアム」を併設したカルチャービレッジとして運営されていたが、地震と津波により被災。博物館だけでも約 23 万点が壊滅、保管庫にあった約 12 万点の文化財も壊滅、職員も 10 数名死亡する事態となった。

松坂泰盛氏の講話

被災した文化財再生のため、岩手県教委、岩手県立博物館などが中心となって、12 年間にわたって活動を進めてきた。1 次レスキュー（被災現場から安全な場所への資料移送）、2 次レスキュー（再生に向けた安定化処理）を経て、令和 4 年度末で約 46 万点のうち約 33 万点の処理が完了した。安定化処理とは、各資料の生物学的劣化要因の除去、化学的劣化要因の除去、物理学的劣化要因の除去のため、除泥・脱脂・除菌・脱塩・乾燥・経過観察を経て、保存・展示が可能な状態にすることである。残る約 13 万点は、漆工品や革製品、ガラス乾板、インクや顔料を使用した紙資料など、処理の難しいものばかりだが、「文化財の復興なくして本当の復興はない」という合言葉のもと、今も市内から 30 分ほど離れた旧生出小学校で作業が続けられている。甦った資料を後世へ引き継ぎ、修復技術を世界に発信することを目標に、昨年 11 月に新しい博物館が開館した。

新たに開館した陸前高田市立博物館

私自身は、昨年、旧生出小学校で行われている作業を見学させていただいているので、新たな博物館に展示されている各種資料は、どれを見ても本当に貴重なものであり、きちんと後世に引き継いでいかなければという思いになった。展示ホールの入口に、骨格標本と「博物館資料なので持ち去らないでください。高田の自然、歴史、文化を復元する大切な宝です。市教委」のメモが展示されている。震災後の混乱した状況の中で見つけられたものだそうだが、これが展示ホールのいちばん最初のところにあることの意義を考え、文化財の再生作業に懸命に従事されている方たちの思いを重ねたときに、展示されている様々な資料の見方が変わるように感じる。



「･･･持ち去らないでください･･･」

また、防災について学ぶ我々としては、やはり「宿命とともに生きる」のコーナーでの、何度も地震や津波を経験してきて、高田の人たちがいかに生きる知恵を学び、そして引き継いできたかというところに興味をもった。特に、明治三陸津波、昭和三陸津波、チリ地震津波を経て、市内各地に残されている津波石碑に刻まれた言葉や、人々の中に残る教訓の数々は、奈良の地においても防災教育を考えていく上での大きな示唆であると考える。

9月6日（水）

9:00	宿舎発
10:00	黒石寺　【奥州市水沢区黒石町字山内 17】
11:00	角塚古墳　【奥州市胆沢区南都田】
11:30	胆沢郷土資料館　【奥州市胆沢区南都田字加賀谷地 1-1】
12:50	岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター・柳之御所遺跡
13:40	中尊寺【平泉町平泉衣関 202】
15:10	毛越寺【平泉町平泉字大沢 58】
17:50	仙台空港着　→　レンタカー返却
18:55	ANA740
20:20	伊丹空港着　　解散

【黒石寺】

729 年、行基菩薩の開基と伝えられ、延暦年間には蝦夷征討の戦火にあい焼失。その後、849 年に慈覚大師が妙見山黒石寺と改め復興した。本尊は「薬師如来坐像（重要文化財）」で、胎内に貞観 4（862）年の胎内銘があり、わが国仏教史の中でも極めて貴重な仏像群を多数所蔵している。旧暦の正月 7 日夜から翌朝にかけて「裸の男と炎のまつり」蘇民祭が行われることでも有名。

黒石寺本堂は明治に再建

【角塚古墳】

角塚古墳にて

日本最北、岩手県唯一の前方後円墳。5 世紀後半に作られたと考えられる。全長 43m、墳丘の高さ 4.3m。調査によって、濠をめぐらし、円筒埴輪と形象埴輪を飾り、葺石を並べた典型的な前方後円墳であることが分かる。

この地方の豪族の墓地と考えられている。伝説では、高山掃部長者の妻が大蛇に変身し、農民を苦しめていたところを小夜姫がお経の力で退治し、その大蛇の角を埋めたのがこの古墳だといわれている。

【胆沢郷土資料館】

歴史書「続日本紀」には、「水陸万頃（すいりくばんけい）」という記述があり、胆沢の地が水に恵まれた豊かな土地であったことが記されている。この地は扇状地であるがゆえ、先人たちが苦労と努力を重ね開拓してきたところであるので、胆沢の歴史は胆沢扇状地の歴史であると言われる。館内には、角塚古墳の出土品模型や、市内の縄文遺跡である大清水上（おおすずかみ）遺跡から出土した土器、石器なども展示されている。

胆沢郷土資料館の展示

【岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター】

世界遺産「平泉」の価値を広く世界中に伝え、人類の共通の財産として後世へ継承するための拠点となるべく、令和３年 11 月に開館した。

仏国土の世界観を映像で投影するプロローグシアター、復元された「平泉館」のジオラマ、柳之御所遺跡から出土した重要文化財など、平泉の文化遺産の価値や、平泉の歴史、平安時代の生活の様子を展示・解説している。柳之御所史跡公園内に設置されており、奥州藤原氏の政庁である柳之御所遺跡を見学できる。

ガイダンスセンターの展示

【中尊寺】

中尊寺金色堂

奥州藤原清衡の中尊寺建立の趣旨は、11 世紀後半に東北地方で続いた戦乱（前九年・後三年合戦）で亡くなったすべての霊を敵味方の別なく慰め、「みちのく」といわれ辺境とされた東北地方に、仏国土という平和な理想社会を建設するというものであったと言われる。その意味でも、清衡の思想そのものは、持続可能な未来を見据えたものであり、「誰一人置き去りにしない」という SDGs の理念に通ずるものであると言っていい。「すべての生きとし生けるもの」のことを考えるというところに、「動植ことごとく栄えんことを欲す」とした聖武天皇と相通ずるものがあると感じる。

【毛越寺】

平安時代後期に奥州藤原氏二代基衡と三代秀衡が金堂円隆寺、嘉祥寺など壮大な伽藍を造営し、その規模は堂塔四十、僧坊五百を数え、わが国無二の霊地と称されたが、その後度重なる災禍に当時の伽藍は焼失した。現在大泉が池を中心とする「浄土庭園」と平安時代の伽藍遺構がほぼ完全な状態で保存されている。

毛越寺は「モウツウジ」と読む。なぜそう読むのかずっと疑問であった。通常、越という字を「ツウ」とは読まないが、越は慣用音で「オツ」と読む。したがって「モウオツジ」が「モウツジ」になり、さらに「モウツウジ」に変化したものであるという説明を聞き、やっと納得した。

毛越寺　浄土庭園大泉が池

全日程を終えて

まず、今回文化遺産調査が実施できなかったことは残念であった。本プロジェクトの柱であり、10 年間にわたって、陸前高田市内および近隣地域の埋もれた文化財を調査し、その価値を教材化して該当地域の小・中学生に知ってもらい、地域に対する誇りや愛着をもってもらうというこれまでの主旨を果たせなかったことは残念に思う。

6 月に学内で参加団員を募集したところ、10 名（文化財調査 4 名、ESD 防災 6 名）の応募があり、面接を経て、文化財調査班 2 名、ESD 防災班 3 名、計 5 名の参加団員を決定し、その後数回の事前学習会や準備会を経て、派遣に備えていた。そのため、文化遺産班として派遣予定だった 2 名の学生には、当初の目的とは違う活動を強いることとなったが、2 名とも ESD 防災の調査・研究にモチベーションを高く持って参加してくれた。

今後、参加した 5 名の学生で、奈良の小学校 6 年生段階における、より「自分事」となる防災・減災教育のあり方について、様々な教科・領域を横断的に学ぶカリキュラムを構築していく予定である。現地で実際に見て、聞いて、感じたことを大事にしながら、効果的なカリキュラムの開発に取り組んでいきたいと思う。

最後に、今回も調査のお世話をいただいた、山田市雄教育長はじめ陸前高田市教育委員会の皆様、特に行程のすべてにわたってコーディネートいただいた陸前高田市立博物館長　松坂泰盛様に心より感謝申し上げたい。

追記：本プロジェクトの第 1 回より多方面にわたってご尽力いただいた、故及川征喜氏の御内儀が、「亡くなった主人が大変楽しい思いをさせていただいたお礼を一言伝えたくて。」と訪ねてこられた。本プロジェクトの歴史と継続している意義深さを強く実感した。

民宿吉田にて

陸前高田市防災教育研修

文化遺産教育専修 4 回生　大竹玲央

陸前高田市は岩手県南部にある市であり、宮城県気仙沼市と隣接している。豊かな自然に囲まれ縄文の時から人々は住んでおり、後の時代には伊達藩の直轄地として扱われたなど長い歴史を持つ地域である。しかし沿岸部の地域であるため災害による被害を何度も被ってきた。2011 年 3 月 11 日、東日本大震災で福島県・宮城県・岩手県沿岸地域は地震・津波による多大な被害を受け、陸前高田市も例外ではなかった。地震発生からしばらくして到達した津波により、市内の建物は流され、人々の命も失われた。残された人々は避難所での生活を余儀なくされ、3 月の寒さの中支援が届くまで厳しい生活が続いた。現在でも復興に関する活動は行われており、完全に復興できたわけではない。復興へ少しずつ進んでいる陸前高田市で防災に関する研修を行うことができた。

今回の研修では様々なことが印象に残っているが、その中でも「津波も怖いが、それよりも恐ろしいのが津波の記憶が風化してしまうことだ」という言葉が印象に残っている。確かに津波の恐ろしさは映像・写真、そして数値からも知ることができる。しかし、この記憶・記録が風化してしまうようなことがあると、次に似たようなことに遭遇した際どのように対応・行動すればいいのか分からないままになってしまう。その結果甚大な被害が生じてしまう。このような最悪な事態を防ぐためにも記録・記憶を風化させてはならない。そして風化を防ぐことは防災に大きくつながっていくと考える。

風化を防ぐためには出来事や教えを語り継いでいかなければならない。今残っている人々から当時の話などを聞き取り、紙媒体や電子媒体など何らかの形で残さなければならない。特に電子媒体ならば資料の風化を考慮することがないので、このような記録を残していく上では非常に効果的なものだと考える。また紙媒体と異なりかさばらないといったメリットを挙げることもできる。紙媒体でなら電子機器を使用することなく誰でも閲覧が可能なので、幅広く震災の教え・出来事を普及させることができる。しかし東日本大震災でもあったように津波による被害を受け、古文書や書簡といった紙媒体の文化財は修復を余儀なくされている。そのためこのような被害を避けるために、電子媒体による記録・保存も有効になってくる。

風化を防ぐといった考えは震災に関する記録だけではなく、戦争に関する記録にも共通すると考える。戦争の記憶を風化させてしまえば、再び戦争が勃発してしまう可能性がある。特に第二次世界大戦に関する語り手は徐々に減少しており、語り部からの伝達が難しくなってきている。そのなかで戦争に関する資料、戦争を経験した人々の日記や戦争により破損した建築・道具などが当時の様子や、戦争の恐ろしさを伝える上で重要な役割を担うと考える。代表的な例として原爆ドーム・平和記念公園が挙げられる。原爆の威力を現在の人々に示すことや、戦争・平和について考えることができる機会を人々に与えることができる。このような形で記憶・記録を風化させない取り組みを行わなければならない。実際に陸前高田市ではタピック 45 や気仙中学校といった震災遺構が残され、東日本大震災津波伝承館といった施設も存在している。博物館のような施設で情報を多く得ることができ、実際に被害を受けた建造物を目にすることで震災の記憶・記録について深く学ぶことができると感じた。伝承館の展示はパネル展示や映像資料の展示が行われていたが、その中でも気仙大橋の破片や破壊された消防車の展示は印象的だった。この展示のように人々に直接訴えかけるような展示が震災の記憶を風化させないためには必要なのだと思った。ただ物的資料の展示だけでは伝えられる情報に限りがあるので、パネル展示でより深い情報を提供することができる。このような形での展示はより詳細な情

報を提供でき、災害から身を守るための教えが視覚的に与えることができると思った。他にも防災クエストといった市内を回りながら震災の記憶や避難場所を知ることができる取り組みが行われている。この取り組みは実際に市内を歩きながら避難場所を確認することもでき、楽しみながら防災について学ぶことができる。我々もこのクエスト受けたが、謎解きが難解なところがあり意外と時間がかかってしまった。

前述の施設だけではなく、陸前高田市在住の方々からもお話を聞くことができた。その中で震災の被害は災害による直接的なものだけではなく二次的な被害も多かったということを知ることができた。避難所での生活や、震災の記憶から生じるストレスなど直接的な被害だけではなく、二次的な被害も多く生じた。心のケアを必要とするのは大人だけではなく、児童生徒たちにも欠かせなかった。その中で市の教育委員会は学校が再開した後、心のケアが必要な児童生徒を把握するための調査を行なった。その中には要注意しなければならない生徒もいた。無事に避難することができても、避難している場所から津波で破壊されていく街や流されていく人々を目にすることがあった。このような光景をみてトラウマを植え付けられた生徒も必ずいたはずである。まずは避難することが防災上必要だが、避難後の対処やケアも考えなければならないことを実感することができた。心のケアは教員だけでは対処しきれないため、外部の機関から専門家を招くことや医療機関と連携することが求められる。普段からチーム学校として活動し、外部機関と連携がスムーズにいくように準備を進めておかなければならないと思った。

本来ならば陸前高田市の文化財調査として参加する予定でしたが、様々な事情により防災班として参加させていただきました。今回の研修で教育という目線はもちろん、文化遺産ならではの目線で防災について考えると資料の活用が欠かせないと思った。実際に震災を経験した人々の証言や破壊された物的資料から様々な情報、教訓を引き出すことができると感じた。また歴史的な目線からでは三陸を襲った地震は過去に何度も発生し、確実なものでは平安時代にまで遡ることができる。文字資料に残されていないが、堆積物からでは平安時代よりさらに昔から、津波の発生があったと明らかになっている。東日本大震災だけではなく、三陸周辺では何度も地震・津波による被害を受けてきており、その中で人々は過去の教えを現在まで伝え、津波が起きた時に備えてきた。このような教えを風化させないためにも防災教育が欠かせないものとなっていると今回の研修で実感した。

左；タピック 45。建物の上部に見える茶色の表示（T.P.14.5m）の位置にまで津波が到達した。
右：東日本大震災津波伝承館で展示されている、津波の被害を受けた消防車。写真では見えないが、手前側に津波で破壊された気仙大橋の残骸も展示されている。

陸前高田市文化遺産調査団に参加して

書道教育専修４回生　櫻木友渚

１．はじめに

陸前高田市文化遺産調査団の参加を希望した理由として、小学生４年生の自身の経験が関係している。当時住んでいた徳島県では、東日本大震災を引き起した地震による大きな揺れは観測しなかったものの、実家のすぐ目の前の海が急速に引いていった。そして、３ｍほどある坂を乗り越えて家の近くまで波が押し寄せた。ひとまず２階に避難し、テレビから流れ続ける津波に飲み込まれる街並みに、何が起こっているのか理解できないまま一晩を明かした。初めて津波というものを認識したあの日以来、実際にこの目であの日に被災地で起こったことを知り、学びたい気持ちを抱えていた。

今回、調査団の一員として貴重な機会をいただき、様々な方面からの見聞、体験を沢山得た中で、自分自身の考え、変化について述べたい。

２．被災地を訪れて

陸前高田市を訪問して感じたことは主に二つある。

一つ目は、海を近くに感じないことである。高い防潮堤により海は見えず、また塩の匂い、波の音もしなかった。しかし、東日本大震災津波伝承館の防潮堤の上にある「海を望む場」に登ると、穏やかな広田湾が目の前に広がり、そこでやっと海の匂いと波の音を感じた。海と町を完全に遮る高さの防潮堤を設置しても、完全に津波の被害から逃れることはできない。町に点在する震災遺構が示す津波の高さに、自身の津波に対する認識の甘さを実感した。

二つ目は、陸前高田市の復興についてである。10 数年で壊滅状態にあった市街地は、非常に綺麗に整備されていた。震災により街を離れた人、離れざるを得なかった人は多くいる。その中でも、慣れ親しんだ地元の再建のため、また震災前の日常を取り戻すため行動されてきた方々のお話を伺った。

学校現場では面談などで個々の被災状況を把握し、高校を卒業するまでこれまでの面談記録を引き継ぎ、一人ひとりの生徒の配慮を行なっていた。また、博物館では陸前高田、そして海がもたらす自然災害への恐れだけでなく、敬いを持って生きる人々の営みを伝えるため、様々な機関と協力しながら再建に取り組んでいる。加えて、今回宿泊した民宿でも、国からの補助金申請書を周りの人と協力しながら書き上げ、震災から約２年後に再建した。多くの方々が自分にできることを考え、歩まれてきた日々の上に、この町や人々の営みが成り立っているのだと実感した。

一方で、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館の語り部の方が仰った「失われた建物などは造ればなんとでもなるけど、震災前の生活という日常が奪われてしまう」という言葉が忘れられない。失われた物の大きさより、形のないものの消失こそが人の心へ大きな傷を残してしまう。復興に終わりがないが、東日本大震災のような大災害から今ある日常が当たり前ではないことに気づき、防災意識を高め、後世へ伝承していくことが復興につながるのではないかと考えた。

3. つなみてんでんこ

陸前高田市で防災謎解きまち歩き型の観光サービスである「防災クエスト大作戦」に参加した。陸前高田市の名所を回り、謎解きに苦戦しながら防災について学ぶ中で「つなみてんでんこ」という言葉を初めて知った。津波が来たら人に構わず逃げろという意味であるが、自分だけ助かれば良いというわけではない。一人ひとりが自分の命を大切に、生きるために避難することによって、最終的には他者を救うことになる、互いの絆と人との信頼の上に成り立つ言葉である。自然がもたらす猛威に対して人間は非力であり、防潮堤などのハード面の対策では限界がある。しかし、防潮堤を越える津波は来るという認識を持つための避難訓練や防災学習などソフト面の対策を行うことによって命を守ることができる。実際に東日本大震災では、被害が大きい地域であっても１人も死亡者を出していない学校が多く存在していた。これまでの自然の猛威を忘れず、自分ごと化して日々の訓練を怠らないこと、そして実際に被害にあった際は想定にとらわれず、その状況下でできる最善の行動をとることが非常に大切であると実感した。

4. おわりに

今回の調査を通じて、大きく認識が変化した点が一つある。それは、東日本大震災で大きな被害を受けた地域は決して無防備であったわけではないということだ。明治三陸地震津波、昭和三陸地震津波、チリ地震津波など幾度となく訪れる大災害の度に、先人たちは津波対策を行い、教訓を残していった。しかし、先人の教えがあり、防災教育に力を入れていても、多くの命が失われたのである。そこには、いざ非常事態が起こった時、危険性を低く見積もることで不快さをなくす「正常化の偏見」が働いていることが大きな原因であることを知った。いつ、どんな状況で地震が起こっても率先して避難ができるようになるためには、自身の避難経路の知識や訓練などの日頃の備え、正確な情報の収集、そして想定に囚われないことが必要となる。これまでに大きな災害を経験していない奈良の地でも、自分の命を守る行動ができる人を増やすために何ができるか、今回の調査を元に模索していきたい。

図１　東日本大震災津波伝承館「海を望む場」

図２　防災クエスト大作戦に取り組む様子

防災・減災教育の大切さ
―事実を知り、学び、伝えていくことの大切さー

音楽教育専修 3 回生 藤本尋巳

1. はじめに

2023 年 9 月 3 日から 6 日にかけて、陸前高田市文化遺産調査団に参加した。私は奈良県で生まれ育ち、幸いにも大きな災害には遭わずに暮らしてきた。避難訓練を経験しても、「奈良県はそこまで被害は及ばないだろう」とどこか他人事のように思っている人も少なくはないと感じた。しかし、近年の異常気象発生頻度の増加、南海トラフ地震の予測等から、いつどこでどのような災害が起こるか分からないことも事実であり、一人ひとりが防災・減災に関心をもつことが求められていると考える。そこで、陸前高田市文化遺産調査団という貴重な経験を通し、まずは、東日本大震災で起こった事実や被災された方の証言を私自身が見聞きし、防災・減災について自分事として考察する。そして、奈良県の教員になったときに、子どもたちにも自分が学んだことを伝え、防災・減災の大切さについて納得しながら行動化することを促せるよう教材開発に取り組みたいと考え、調査団に参加させてもらった。

2. 現地で学んだ防災・減災教育における大切にしたい視点

2.1 震災の事実を知り、学ぶ

2011 年に起こった東日本大震災から 12 年が経ち、現在の小学生は震災後に生まれた子どもばかりである。菅野様の講話の中で、「震災がもたらしたもの、地震・津波・火災等の災害に関する知識をきちんと勉強しなければ、震災の教訓は残っていかない。風化させてはいけない。」と仰っていたことが心に残っている。震災がもたらした事実を知り、学ぶ上で特に伝えたいと考えた点を二つ挙げる。

一つ目は、震災がもたらした被害の大きさや恐ろしさについて、残された写真や映像、様々なデータ、証言等から正しい知識を得ることである。大きな地震が起きると、沿岸部では津波が押し寄せ、内陸部においても、津波により川が逆流して堤防が決壊し、さらには火災までももたらす。私自身、岩手県陸前高田市や気仙沼市の震災遺構で被災状況を実際に見て、こんなにも高い津波が街を襲ったのだと想像すると、言葉が出ないほど恐ろしかった。そしてその津波は、時速 70～80 ㎞で迫ってくるため、一瞬にして街の様子を変えてしまう。一瞬だからこそ、一分一秒でも早く避難しなければならない重要性を実感した。

旧気仙沼向洋高校
冷凍工場の激突跡

二つ目は、震災が起こった直後の人間の心の動きだ。震災直後、被災された方の中には、「この地区には津波は来ない」という安全神話を信じたり、逃げるのをやめて家に物を取りにいったり等、すぐに逃げない人が少なくなかったそうだ。逃げられるのに逃げない理由には、異常事態や非常事態に遭ったときに、危険性を低くみつもることで不快さをなくそうとする人間の心理がある。根拠もなく「自分は大丈夫だ」と思ってしまうこの心の動きは、人間の心理上取り消せない。しかし、この心の動きが人間にはあると知り、様々な想定をしながら避難しなければならないと学んだ。

陸前高田市　ユースホステル

2.2 事実や教訓を伝承していく

東日本大震災は2011年に起こったが、1896年に明治三陸地震、1933年に昭和三陸地震、1960年にはチリ地震の影響により、地震や津波による災害は繰り返し生じており、今後もいつ起こるか分からない。日常生活の中では想像しきれないほどの災害について、災害への正しい知識理解とともに、実際に被災された方の声や想い、教訓をきちんと受け継いでいかなければならないと感じた。今回私が学んだ中で、特に伝えたいと感じたものを二つ挙げる。

一つ目は、「津波てんでんこ」の教訓だ。地震が来たら、てんでんばらばらに一人一人が自分の命を守り、素早くそれぞれに行動を取るべしという教えである。「自分で自分の命に責任をもつことが、家族や地域を守ることに繋がるのだ」といった言葉が印象に残っている。震災時、家族や周りの人を探そうとし、奪われた命があることも事実である。この教えは、地震に限らずあらゆる災害に共通するものだと感じた。台風や風水害においても、誰かを助けようとしている間に被害の状況はどんどん悪化していき、避難できなくなる可能性は十分にある。助けられるのではなく、自分から率先して避難しなければならない。そのためには、普段から災害が起きたときのことを想定し、自分の取るべき行動を理解しておくこと、自分で考え自分の命を守る意識を養う必要があると考えた。

二つ目は、想定に捉われず、置かれた状況で最善を尽くす行動を取るということだ。震災当時の気仙中学校の教員や生徒を例に挙げると、まずは全員で第一避難所に避難し、第二避難所は沿岸に近い気仙小学校だったが、大きな津波が来ることを予想して山に避難し、より高い場所を選択したことにより生徒全員が助かったそうだ。その場にとどまらずに、「ここだと危ないかもしれない」という意識を持ち、最善を尽くせるよう主体的に判断することが大切である。また、ハザードマップを使って被害の大きさや可能性を知ることも大切だが、その予想以上の災害も起こりうるということを心づもりしておかなければならないと学んだ。東日本大震災による津波では、震災当時に周知されていた津波ハザードマップによる浸水予想範囲をはるかに上回る範囲で浸水した。予想に捉われず、その場で自分が見聞きした自然の様子や情報をもとに、命を守る行動を取らなければならないと学んだ。

2.3 防災教育とESDの視点との関連

防災・減災教育について考えを深める中で、ESDの視点と結び付けられる点があると考えた。「津波てんでんこ」の教訓にもあるように、自分の命を自分で守ることの責任性、普段から要配慮者の対応も視野に入れ、コミュニティでみんなを巻き込みながら「共に」助け避難するための連携性も必要となってくる。学校現場で、防災教育を学校内にとどめることなく、地域の一員として子どもたちが災害時に行動できるよう、地域と連携・共生しながら学びを展開し、コミュニケーション能力や他者と協働する姿勢を養いながら、地域の防災について考える時間を取り入れたいと思った。また、過去の災害から学び、今後の自然災害を予想しながら防災の取り組みを考え、地域の方と学び合うことも、災害に強いまちづくりに必要だと思った。このような視点を踏まえ、防災・減災教育の教材開発、学びの設計に取り組みたい。

3. おわりに

今回の調査では、自然がもたらす威力や震災時の人々の状況・心境について、現地に赴くことで学べるものがたくさんあった。大変貴重な経験をさせていただき、ご協力頂いた多くの方々に改めて感謝を申し上げる。そして、今回学んだ防災・減災の教訓・被災された方の思いや願いを奈良の地で発信し、恩返ししていきたい。

令和５年度 陸前高田市文化遺産調査に参加して

文化遺産教育専修　３回生　村島大賀

１．はじめに

2023 年 9 月 3 日から 6 日にかけて陸前高田市文化遺産調査団の ESD 防災班として参加した。私は 12 年前に日本で起きた大震災である、東日本大震災の被災地に初めて訪れ、被災した地域やそこに住む人々など多くのものと触れ合い経験した。震災が発生した当時、私は小学生であり、その被害の状況や何が起こったのかということに対して十分な理解を得ることができず、これまで自分自身が大きな災害に見舞われた経験がないことから被災することについて本当の意味で理解することができなかった。今回の調査を通して、災害の恐ろしさやそれがいつ誰の身にも起こり得るものであることを改めて認識させられた。以下では今回の調査を通して、私が学んだことやそれについて感じたことについて述べていく。

２．“災害から逃げる”ことへの認識

図 1 東日本大震災津波伝承館の展示

東日本大震災が未曽有の大災害であり、国内外に大きな影響を与えたことは周知の事実である。しかしながらそれは想定されていた大災害だったのだろうか。答えは否である。誰もが当たり前の日々を、日常を、何気なく過ごしていた最中に地震が発生し、その影響によって津波が多くの地域を巻き込んでいったのだ。地震や津波などの自然災害は予測不可能な脅威であり、私達人類は逆らうことはできない。だから上手く付き合っていくしかないと東日本大震災津波伝承館（図１）の職員の方からお話を聞いた。自然災害から自分の命を守るためには何をするべきであるのか常に考え、行動することが何よりも大切なことであると学んだ。

しかしながら自然災害という脅威に対して、すぐに避難することは客観的に考えると必然であることは確かである。私達は災害が自分の目の前で起きたとしても、それに備えた動きができるように、避難訓練などによって防災への意識を高めている。しかし実際には地震が発生して､津波が押し寄せてきたことを認知してすぐに非難しようとした人の数は、全体の 6 割程度で残りの 4 割は様々な理由ですぐに避難しなかったのである。陸前高田市だけでなく、地震の被害が頻繁にある周辺の地域では大きな地震が起きた後には必ず津波がやってくるという認識を持っていたにも関わらず、なぜ全ての人が避難するという選択肢を選ぶことができなかったのか。それは「自分に起きていることは現実ではない」という一種の自己防衛から引き起こされたのである。地震という強大な外的要因によって引き起こされるものは津波だけではなく、人々にストレスという形で重く圧し掛かり、合理的な手段を取ることができないのだ。私はこれだけ日本各地に災害が発生し、幾度も災害に備えた対策を行っているにも関わらず、真っ先に避難を行うという選択肢を取ることができないのはなぜかと疑問に思っていたが、想定しなかったことが起こるとすぐ行動に移す

ことは難しいと今回の学びを通して改めて感じた。

過去には同様の自然災害はいくつも発生しており、その度に先人達は同じ被害を生むことがないよう、後世に教訓を残してきた。しかし何時如何なる時でも想定外のことは起きる可能性があり、「絶対安全」「絶対問題ない」というものは存在しない。どのような状況においても、自分の命を守るために自分が取るべき行動をそれぞれが見つけ出して、実行する。その１つ１つの行動が周りの人々に伝播していき、他者を助けることに繋がっていくのではないかと私は考えた。

３．復興だけではない次へのステップ

震災から 12 年の月日が流れ、陸前高田市の町並みは少しずつ活気を取り戻しつつあると山田教育長は言った。実際に陸前高田では震災の惨状から立ち直り、松原の道の駅では多くの人々で賑わっており、飲食店などでは外部から訪れた人々で盛んになっていた。震災前には青々と茂っていた高田松原も徐々にその姿を取り戻していた。建物や風景などは長い時間をかけて､作り直すことはできる｡しかしながら人々が経験した記憶や記録は人々が残そうと考えて行動しない限り、残すことはできない。長い時間をかけると経験や記憶が薄れていき、次に活かすための知識や教訓を伝えていくことができないと陸前高田市立図書館館長の菅野館長は言っていた。陸前高田市で起きた災害はその地域に限られたものではない。日本各地どこでも同じような被害が発生する危険性は十分に考えられ、対策やそれに関する知識を必要としている。「何が起きるのか」ではなく､「どう行動する、考える」べきであるのかについて知るためには、人々が災害について知らなければならず、そのためには各地域の教育に防災という概念を組み込んでいく必要があると私は考えている。その教育を展開していくためには、実際に現地に訪れ、現地の住民の方々の意見を聞いた上で、自分達には何ができるのかについてそれぞれが考えていくことが求められる。災害前の姿に戻すことだけではなく、そこから次にどのような形で今回のことを繋げていくのかという部分が非常に重要であり、自分自身で思考することの大切さがあるのではないかと考えた。

図２　3.11 希望の灯り

４．最後に

今回の陸前高田市での調査を通して、東日本大震災がもたらした影響やその被害に遭った地域の人々の生の声を聞くことができた。統計などのデータではなく、実体験から語られた 1 つ 1 つの言葉が自分達の記憶に鮮明に残っており、調査する以前から聞いていた「つなみでんでんこ」という言葉の深い意味を知った。同時に災害の影響は自分達にも訪れるものであり、自分の命を守る行動を考えなければならないと改めて認識させられた。奈良の地で津波が起きる可能性は限りなく低いが、起こる災害は未知数でありそのことを自分だけではなく、これからを生きていく生徒や周りの人々に伝播させていくことが、自分が今回の調査に加わった目標であると考えている。

陸前高田市文化遺産調査団に参加して

国語教育専修２回生　田中愛花

1.　はじめに

私は、2023 年 9 月 3 日から 6 日までの 4 日間陸前高田市文化遺産調査団 ESD 防災班として参加した。陸前高田市の東日本津波伝承館、気仙沼市の気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館、名取市震災復興伝承館をはじめ、東日本大震災の実態を知ることのできる施設に沢山訪問することができた。また、実際に東日本大震災を体験した菅野稔氏氏や松坂泰盛氏の講話や、語り部の方の話を聞くことができた。多くの質問にも丁寧に答えてくださり、大変充実した時間を過ごすことができた。

私は今回の調査で、東日本大震災の脅威と防災・減災の意識を持つことの大切さを肌で感じた。参加した 4 日間で学んだことを、「防災・減災教育」と「未来へ繋ぐ復興」をテーマに述べる。

２. 防災・減災教育

我々は、防災・減災教育について陸前高田市立図書館長をされている菅野稔氏の講話を聞くことができた。初めに菅野氏がおっしゃったことは「今の小学生は、東日本大震災を知らない」ということである。確かに、震災から 12 年経っているので計算上当たり前のことだ。しかし、日本に計り知れない衝撃が走った天災を知らない人がいるのだということに、私は驚いてしまった。そして、直接体験でない事象をもとに伝える防災・減災教育は、とても重要でありながら、難しいものだと思った。菅野氏には、防災・減災教育に大切な四つのことを教えていただいた。一つ目は、安全教育を進めることである。安全教育を通して自分で生きていく力をつける。二つ目は、被災から連想することである。天災は地震や津波の他にも台風による風水害・停電、断水・渇水、異常気象などさまざまなものがある。多種多様な天災によって引き起こされる状況を前もって知っておくことは重要なのだ。三つ目は、地域の特性からの連想である。陸前高田市は、東日本大震災が連想され、今後も津波が広い範囲で起こりうる地域であると考えることができる。四つ目は、聞くことの大切さである。直接体験でないことを知るには、体験者の記憶に加えてさまざまな調査の記録を聞くことが大切になってくる。

菅野氏の話の中で、避難をする際はマニュアルにとらわれず「命を守ること」を優先して行動するという話があった。この考えは、多くの伝承館でも学ぶことができた。東日本津波伝承館では、気仙中学校が例に挙がっている。気仙中学校では、東日本大震災が起こる数年前に大津波の避難訓練や避難場所の見直しが行われていた。東日本大震災が起こった際は、あらかじめ決めていた第一避難所にすぐに避難し、十分な高さではないと判断すると、第二避難所、第三避難所と場所を移した。最終的にはマニュアルにはない、第三避難所よりも高い二日市公民館まで避難することとなった。結果、在籍の生徒・教職員は全員が無事であった。気仙中学校では、地道に津波を想定した避難訓練や津波体験者の防災講話を毎年実施していたことに加え、生徒や教職員が津波の恐ろしさと避難の大切さを聞かされ続けて育ってきたことで緊急時にも咄嗟に「命を守ること」を優先して行動することができたようである。この事例から、私は、防災・減災教育の目指す最終目標は、緊急時に自分で「命を守ること」を優先した行動を取れるようになることではないかと思った。

図１　屋上まで津波が襲った気仙中学校

3. 未来へ繋ぐ復興

震災から 12 年が経った今、陸前高田市は確実に元気を取り戻してきていると感じた。新しい建物が並び、浜辺には再植林された若い松が連なっていた。今年には陸前高田市立博物館も再建され、東日本大震災で失われかけた文化財も着々と元通りになっていた。私は、復興が進む姿を初めて自分の目で見て、さまざまな人の力や想いが陸前高田市に詰まっているのだなと思った。

我々が、陸前高田市立博物館長の松坂泰盛氏の話を聞いたとき新・博物館の基本理念というものを知った。それは、陸前高田の豊かな自然・歴史・文化を、震災の記憶とともに未来へ伝え、地域に根差し活力あるまちづくりを推進する総合博物館であった。私は、なぜ博物館を再建することが活力あるまちづくりへつながるのか疑問に思い調べてみた。その答えは、博物館の宝物一つ一つに、そのまちの物語と発見が詰まっているからだそうだ。博物館に行けば、その町の人々の故郷がどのような場所なのか、どんな自然や歴史、暮らしがあるかわかる。これまでの陸前高田に関わる人と、これから陸前高田に関わる人の架け橋となるのが陸前高田市立博物館であるそうだ。私はもう一度、個人的に博物館に訪れてその真意を汲み取りたいと思った。

学校現場では、今でも心の復興に取り組んでいるようだ。心と体の健康を定期的にチェックし、その内容を小学校・中学校・高校と引き継ぐ体制が整っている。また、子ども個々の背景を配慮した発言や、活動をされているそうだ。震災に見舞われた子ども達を、地域全体で支えようという意識をひしひしと感じた。

4．最後に

今回の調査団に参加して本当によかったと思うことは、震災から復興するまちを自分の目で見ることができたことである。2011 年 3 月 11 日にテレビで見た東日本大震災は、あまりに衝撃が強く復興されていく様子など考えられない光景だった。しかし、今回の調査で整備されているまちの様子や伝承館に残る記録を見たり、語り部さんの話を聞いたりする中で、陸前高田の人々の強さを感じた。図２は、陸前高田市立博物館再生のシンボルとなっている書き置きである。「博物館資料を持ち去らないでください。高田の自然、歴史、文化を復元する大切な宝です。市教委」と書かれている。実はこれ、市の教育委員会の方が書いたものではない。地域の方が機転を効かせてこのメッセージを残したのではないかと言われている。もちろん、自分の命を守ることが最優先だが、生死の瀬戸際でこのような勇気ある行動ができる人もいるのだと感心した。

これからは、私が今回陸前高田で学んだことや感じたことを、奈良県の教育に生かしていくにはどうすれば良いか真剣に考えていきたい。

図２　陸前高田市博物館にて

図３　震災遺構タピック 45

陸前高田市文化遺産調査における ESD 教材開発（11）

－　小学校における自分事化できる防災・減災教育の方向性　－

大竹玲央・村島大賀
（奈良教育大学　文化遺産教育専修）
櫻木友渚
（奈良教育大学　書道教育専修）
藤本尋巳
（奈良教育大学　音楽教育専修）
田中愛花
（奈良教育大学　国語教育専修）
大西浩明
（奈良教育大学 ESD・SDGs センター）

The 11th Teaching Material Creation for Education for Sustainable Development through Researching Cultural Heritage in Rikuzentakata City

－　Direction of Disaster Prevention and Mitigation Education in Elementary School　－

Reo OTAKE , Taiga MURASHIMA
(Cultural Heritage Education Specialization, Nara University of Education)
Yuna SAKURAGI
(Calligraphy Education Specialization, Nara University of Education)
Hiromi FUJIMOTO
(Music Education Specialization, Nara University of Education)
Aika TANAKA
(Japanese Education Specialization, Nara University of Education)
Hiroaki ONISHI
(Center for ESD and SDGs, Nara University of Education)

要旨：陸前高田市文化遺産調査において、ESD 防災班は、見学や聞き取り調査などを経て、何度も津波災害を経験している陸前高田の人でさえ、いざというときに正しい行動がとれないということを知り、防災・減災についてより自分事として捉え、命を守る行動がとれる人になることの重要性を改めて認識した。本稿では、奈良県内の小学校 6 年生を対象に、年間を通じて様々な教科と連携した総合的な学習の時間に、防災・減災教育を位置付け、連続した学びの中でより自分事化でき、さらには自身が積極的に地域と協働することを目指した「防災教育プロジェクト」を提案する。

キーワード：ESD（持続可能な開発のための教育）　Education for Sustainable Development
防災・減災教育　Disaster Risk Reduction Education
自分事化　make it one's own affair

1．はじめに

奈良教育大学では、2012 年度より毎年陸前高田市文化遺産調査団を結成し、岩手県陸前高田市周辺の文化遺産調査などに取り組んできた。コロナ禍により、2020 年度、2021 年度は中止を余儀なくされたが、2022 年度より再開し、2023 年度は本学教員 2 名、学部生 5 名からなる調査チームで、9 月 3 日～6 日にかけて、文化遺産調査班と ESD 防災班の 2 班に分かれて活動を行う予定であった。しかし、文化遺産調査担当の教員が急遽不参加となり、全員が ESD 防災班となって調査･研究を行うこととなった。本稿は、その 6 名による研究報告である。

昨年度の研究報告において、井阪ら（2023）は奈良県における中学校 2 年生を対象とした、自分事化できる防災・減災教育の方向性について、総合的な学習の時間や各教科をつないで連続的な学びを展開することで、「守られる側から、守り行動できる側になる」カリキュラムを提案した。これを受け、今年度はそこにつながる小学校 6 年生段階では、どのような連続した学びが必要かを調査・研究することとした。現在の小学校における防災・減災教育の在り方を批判的に見つめ、真に自分事となり得る防災・減災教育はどうあるべきか、どのような資質・能力を児童の身につけておかなければならないのか、また、そのためにはどの

ようなカリキュラムが考えられるかなどを、震災時または震災後の被災地の取組に学び、提案しようとするものである。

表１　４日間の主な日程

３日（日）	・雷神山古墳見学 ・名取市震災復興伝承館見学 ・多賀城跡・多賀城碑見学 ・東北歴史博物館見学 ・東日本大震災津波伝承館見学
４日（月）	・陸前高田市教育委員会表敬訪問 ・防災クエスト大作戦に参加 ・気仙大工左官伝承館見学 ・陸前高田市内の震災遺構見学 （一本松、タピック４５，旧気仙中学校）
５日（火）	・気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館見学 語り部ガイドによる説明 ・講話「防災教育と復興教育について」 陸前高田市立図書館長　菅野稔氏 ・講話「陸前高田市立博物館の再建」 陸前高田市立博物館長　松坂泰盛氏 ・博物館見学
６日（水）	・黒石寺見学 ・角塚古墳見学 ・胆沢郷土資料館見学 ・岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター、柳之御所遺跡見学 ・中尊寺見学 ・毛越寺見学

２．調査から見えてきたこと

今回の調査活動で、特に小学校においては日常的に防災・減災に関わる学びを意図的に組み込むことが重要であることを学んだ。そう感じた事例を２つ取り上げ、さらに陸前高田市の小学校における防災教育と奈良県との比較を述べる。

２．１　「防災クエスト大作戦」

陸前高田市では、今年１月からまち歩きしながら楽しく防災を学ぶ体験型観光サービス「防災クエスト大作戦」の提供が始まっている。東日本大震災を知らない世代に教訓や備えの大切さを伝えるため、かさ上げした中心市街地で「防災の謎解き」に挑むものである。観光案内センターで参加料 500 円を払って問題用紙をもらう。指定された５つのポイントへ行き、そこに掲示された指示に従って問題の答えを埋めていくと、ある言葉が浮かび上がる。出揃った５つの答えをさらに指示通りに並び替えると、最後の謎解きとなり、最終的に一つの言葉を導き出すという内容であった。歩く範囲はそう広くはなく、１時間から１時間半程度で回れるということだったが、一つ一つの問題がなかなか凝ったもので、そう簡単に答えの出るものはなかった。途中、本丸公園に上がる避難路の階段を上ったり、「津波てんでんこ」の言葉が出てきたりと、防災について楽しみながら体感できる内容であった。

参加した学生の中には、「津波てんでんこ」という言葉を初めて知る者もあり、これはいったい何かと早速調べる様子が見られた。

２．２　遊びの中に学びを

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館の見学において、語り部ガイドを務めてくれたのは、二十歳の男子学生だった。彼は、震災当時はこの地域の階上小学校の２年生、ずっとこの地で育ち、今は伝承館となっている気仙沼向洋高校に入学。在学中に「語り部クラブ」をつくり、卒業後も活動を続けているという。震災当時の教員や関係者に直接当時の話を聞き、「どうしても伝え続けていきたい」という強い思いをもって活動されているようだ。

そんな彼に、「小学生に対する防災教育で大事なこと」について聞いたところ、「とにかく災害を身近に感じていてほしい。自分は『防災かるた』などで遊びながら大事なことを学んでいたように思う。」と語ってもらった。奈良においても、「防災かるた」などは、自分たちが学んだことを発信したり、日常的に防災を意識化したりするには、いい取組ではないかと感じた。

２．３　陸前高田市における防災教育の現状

講話をいただいた陸前高田市立図書館長の菅野稔氏より、陸前高田市内の４小学校の防災教育計画を提供いただいた。これらを見ると、どの小学校も学年の発達段階に即した学びを、教科横断的に編成していることが分かる。また、岩手県教育委員会が推進する「いわての復興教育プログラム」に基づき、各校とも復興教育計画を併せて編成している。「いわての復興教育」は、東日本大震災の体験から得られた３つの教育的価値（いきる・かかわる・そなえる）を育てることであるとし、児童生徒の学びが学校を超え地域全体に広がり、さらには児童生徒の学びを支えようとする多くの大人が力を合わせ新たな地域の姿を構築することを目指している。

一方、奈良県は、幸いにも比較的災害が少なく、防災に関する学びは単発で終わることも多く、ここまでの防災・減災教育は行われていないのが現状である。地震に関する避難訓練は年１回は行われるものの、学校行事化している側面もある。近い将来起こるであろう南海トラフ地震についても、知識としては身についているものの、防災・減災そのものが自分事化できていないという現実がある。これでは、いざ大きな地震などの災害が発生したときに自分の命さえも守れないのではないかという懸念が起こる。

３．防災教育プロジェクト

表２　「防災教育プロジェクト」ストーリーマップ

奈良県小学校第６学年　総合的な学習の時間

「自分の周りで災害発生！？自分も地域も守れる防災マイスターになろう！」

目指す子どもの姿

災害時に、自分だけでなく周囲の人の命も守る率先避難者となれるよう、防災を自分事化して考え、災害に強い地域づくりに貢献することができる。

ESD の資質・能力

◇未来像を予測して計画を立てる力
自分の命に責任を持った考えや行動ができる

◇他者と協力する態度
地域の人々の防災力を高め、助け合うことができる

◇進んで参加する態度
意欲的に防災活動に参画し、防災力の高い地域づくりに貢献できる

ESD の価値観

◇世代間の公正を意識できる
震災に強いまちづくりには、大人も子どもも共に助け合っていくことが大切である

◇幸福感に敏感になる
震災に強いまちづくりを協力して進めたことで、震災の被害を最小限に抑えられる

学習目標

① 自分の身近な地域で起こりうる自然災害について理解できる。

② 過去の災害の教訓から学んだことを通して、一人ひとりが自分の命に責任を持った行動ができるようになる。

③ 地域の防災の課題を知り、地域社会の一員として地域の安全や防災力向上に向けて行動できるようになる。

各教科等の連携　　総合的な学習の時間　　各教科等の連携

課題設定
「災害時に、地域の人と共に命を守る行動ができるように必要なことは何だろう」

〈理科〉
「大地のつくりと変化」
・災害発生のしくみ

〈音楽〉
「《花は咲く》を、震災時の状況や人々の想いを知り、思いを込めて歌おう」
・《花は咲く》の歌詞の理解

ステージ１
「東日本大震災当時、人々はどのように受け止めたのだろう？」

〈国語〉
「被災された方に、手紙を書こう」
・教訓の読み取り

ステージ２
「私たちの住む地域で起こりうる災害を知り、命を守る行動について考えてみよう」

〈社会〉
「奈良県内の教訓碑や避難体験施設を見学しよう」
・自然災害への理解

ステージ３
「災害時の人々の心の動きを知り、災害時に備えるために必要なことを考えよう」

〈社会〉
「防災パンフレットを作ろう」

ステージ４
「地域の人と助け合い、災害に強いまちづくりに貢献しよう」

〈国語(書写)〉
「防災カルタを作ろう」

〈音楽〉
「《花は咲く》を、防災ベントで披露しよう」

地域の防災イベントの開催

そこで、私たちは、奈良県の小学校 6 年生を対象とした「防災教育プロジェクト」と題し、各教科等との学びと結び付け、カリキュラム開発を試みた。

３．１　プロジェクトの概要

プロジェクトの表題を「自分の周りで災害発生！？自分も地域も守れる防災マイスターになろう！」と題し、課題設定を「災害時に、地域の人と共に命を守る行動ができるように必要なことは何だろう？」とした。災害が発生したときに、誰かの助けを待ったり、焦ってその場に留まったりするのではなく、児童一人一人がメタ認知システムを働かせ、率先避難者として積極的に行動できるようになってもらいたい。そして、自分だけが避難するのではなく、地域の人や自分よりも年齢の低い子どもたちを巻き込み、地域社会の一員として役立とうとする姿勢や行動力を備えることを目指す。そのため、本プロジェクトでは、東日本大震災の被害状況や人々の記録から震災について学んだ後、より身近な地元奈良県の自然環境や過去に起こった災害に着目し、災害がいつ起こるか分からないという意識のもと、防災を自分事化して考えさせたい。その方略として、奈良県内小学校６年生における、総合的な学習の時間と各教科との往還による、年間を通した防災教育プロジェクトとして、カリキュラム・マネジメントを行うものである。

まず、プロジェクトを「課題設定」「ステージ 1～4」と分け、最終目的として地域の防災イベントに企画・参加することを掲げた学習計画表を作成した。各ステージにおいて、各教科と総合的な学習の時間とを往還し、それぞれの学習内容を活かし、結び付けながら学習を進めていく。カリキュラムの中間地点あたりからは、地域の方との交流の時間を設け、地域の方と親睦を深めるだけでなく、「学んだことと自分たちの住む地域での防災がどのように結びつくのだろうか」、「自分たちは地域のために何ができるのだろうか」といった視点を身に着けてもらいたい。施設見学、自分の感じたことを言語化したり歌唱表現に活かしたりする活動、学んだことを作品としてまとめるといったように、児童が主体的かつ多角的に学べる活動を多く取り入れ、児童が自分の命はもちろんのこと、地域の人や周りの人の命をも守る行動ができる人になりたいという意識が芽生え、価値観の変容が生まれることを目指す。

３．２　プロジェクトの学習過程

「課題設定」時には、「災害時に、地域の人と共に命を守る行動ができるように必要なことは何だろう？」と児童に投げかけ、ただ命を守るのではなく、「地域の人とともに」できることは何なのか、自分たちが何をしなければいけないのかといった問題意識を芽生えさせたい。

そのために「ステージ 1」では、東日本大震災の被害状況や被災者の方の思い、三陸地方に伝わる「教訓」などから自然災害の恐ろしさや悲惨さを知り、普段はどこか他人事として捉えがちな自然災害について理解する。

「ステージ２」では、前ステージでの学びを踏まえ、実際に自分たちの住む奈良県に焦点を当て、過去の災害や現在行われている防災活動について学ぶ。

そして、「ステージ３」では、「なぜ、人は災害が起こった時に逃げないのか」という問いかけをし、人間の心の動きを知るとともに、防災について日頃から意識しておくことの必要性と重要性を感じてもらいたい。

最後に、「ステージ４」では、一年間の学びを振り返り、学んだことを次は地域の人や他学年に発信できるよう、各教科の学びと結び付けながら学習を締めくくる。

このように、本学習は、年間を通して理科・国語科(書写)・社会科・音楽科などと密接に関わりあいながら、児童の学びが連続して習得されるようにした

４．本プロジェクトで期待すること

本プロジェクトを作成するにあたり、奈良県内の小学校における防災教育の課題は、災害が少ない土地柄に起因した防災意識の低さであると考えた。そのため、ステージ 1～4 の段階的な学習によって児童自らが災害に対する危機意識を持ち、地域の人々を巻き込みながら避難できる率先避難者としての自覚の芽生えと行動力の獲得に期待する。最終的に、児童が防災学習の集大成として地域の防災イベントに参加・活動を行うことにより、児童だけでなく家庭、地域の防災意識が高まることを期待したい。

児童は災害が起きた際、大人の指示待ちの状態に陥りやすい。特に災害に不慣れな奈良県内の小学生はなおさらである。しかし、いつ、どんな環境で被災したとしても、自らの命を守る行動を行うことができれば、結果的に多くの人を救うことに繋がる。核家族化が進み、地域とのつながりが希薄になりつつある現代において、大人の指示がなくとも正しい判断と行動できる児童は、家族や地域にとって非常に重要な存在となる。

本プロジェクトが、自分の命は自分で守る自助の意識、状況から、自分のできることを考え行動できる共助の意識へといった、児童の主体性が育まれるものになると期待する。

５．おわりに

最近では、地域を挙げて自主防災訓練に取り組んでいるところも多くみられる。しかし、そこに小学生が多数参加している地域は少ない。中学生は避難所運営などの役割などもあって参加することが多いのだろうが、小学生の場合はそこでの役割などもないことが多く、単なる地域イベントの一つと捉えているのではないかと思われる。そこで、本プロジェクトの一応のゴールを、地域の防災イベントに積極的に参加することとし、「自分たちの地域は自分たち

で守る」ために、地域の様々な人たちが働いていることを実感するとともに、児童自身も地域を守る一員であることを自覚できるようにと、本教材を開発した。

本稿で提案した防災教育プロジェクトについては、今後連携する教科等の具体的な計画を作成、実践し、その検証を図るとともに、奈良版「防災カルタ」などを作成し、防災・減災について小学生が日常的に学べるような取組を考えていきたい。

参考文献

坂本和音・加藤真由・北村恭康(2020)「陸前高田市文化遺産調査における ESD 教材開発(9) ―ハザードマップの情報から防災を考える ―」　奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要第 6 号　p.165-171

井阪愛子・川田大登・木幡美幸・大西浩明(2023)「陸前高田市文化遺産調査における ESD 教材開発(10) ―中学校における自分事化できる防災・減災教育の方向性―」奈良教育大学 ESD・SDGs センター研究紀要第 1 号 p.75-78

国土交通省、防災教育ポータル https://www.mlit.go.jp/river/bousai/education/precedent.html（2023 年 11 月 21 日最終閲覧）

防災プロジェクト学習

奈良県小学校第６学年　総合的な学習の時間

「自分の周りで災害発生！？自分も地域も守れる防災マイスターになろう！」

目指す子どもの姿

災害時に、自分だけでなく周囲の人の命も守る率先避難者となれるよう、防災を自分事化して考え、災害に強い地域づくりに貢献することができる。

ESD の資質・能力

◇未来像を予測して計画を立てる力
自分の命に責任を持った考えや行動ができる

◇他者と協力する態度
地域の人々の防災力を高め、助け合うことができる

◇進んで参加する態度
意欲的に防災活動に参画し、防災力の高い地域づくりに貢献できる

ESD の価値観

◇世代間の公正を意識できる
震災に強いまちづくりには、大人も子どもも共に助け合っていくことが大切である

◇幸福感に敏感になる
震災に強いまちづくりを協力して進めたことで、震災の被害を最小限に抑えられる

学習目標

① 自分の身近な地域で起こりうる自然災害について理解できる。
② 過去の災害の教訓から学んだことを通して、一人ひとりが自分の命に責任を持った行動ができるようになる。
③ 地域の防災の課題を知り、地域社会の一員として地域の安全や防災力向上に向けて行動できるようになる。

各教科等の連携	総合的な学習の時間	各教科等の連携
〈理科〉「大地のつくりと変化」・災害発生のしくみ	**課題設定**「災害時に、地域の人と共に命を守る行動ができるように必要なことは何だろう」	〈音楽〉「《花は咲く》を、震災時の状況や人々の想いを知り、思いを込めて歌おう」・《花は咲く》の歌詞の理解
〈国語〉「被災された方に、手紙を書こう」・教訓の読み取り	**ステージ１**「東日本大震災当時、人々はどのように受け止めたのだろう？」	
〈社会〉「奈良県内の教訓碑や避難体験施設を見学しよう」・自然災害への理解	**ステージ２**「私たちの住む地域で起こりうる災害を知り、命を守る行動について考えてみよう」	〈社会〉「防災パンフレットを作ろう」
〈国語(書写)〉「防災カルタを作ろう」	**ステージ３**「災害時の人々の心の動きを知り、災害時に備えるために必要なことを考えよう」	〈音楽〉「《花は咲く》を、防災ベントで披露しよう」
	ステージ４「地域の人と助け合い、災害に強いまちづくりに貢献しよう」	
	地域の防災イベントの開催	

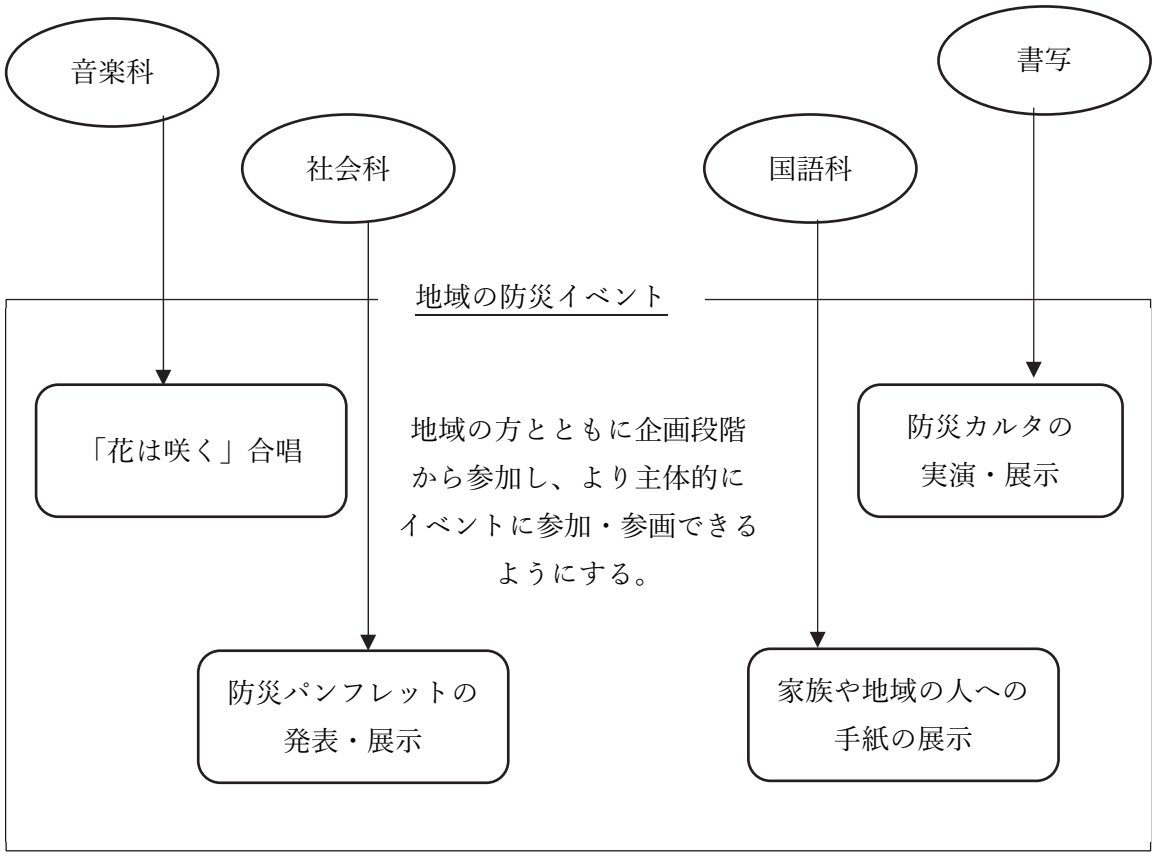
奈良県の小学校６年生を想定して、前ページのようなストーリーマップを作成した。

総合的な学習の時間において、「自分の周りで災害発生！？　自分も地域も守れる防災マスターになろう！」を進めるにあたり、音楽科、理科、社会科、国語科、書写などと連携して学習を組み立ててみた。ゴールとしては、地域の防災訓練などのイベントにおいて、学びの成果を多くの人に発信するものである。

ストーリーマップにもあるように、総合的な学習の時間を軸にしながら学習を進める。

音楽科で「花は咲く」を歌唱することをきっかけに、東日本大震災について興味・関心を高め、理科においては地震や津波などの災害発生のメカニズムを理解するとともに、東日本大震災の被害の状況などについて知る。これと並行して、国語科では被災された方の記録文から感じたことや命を守ることへの思いなどを、家族や地域の方に対して手紙の形にして表現する。また、社会科では身近な地域の防災への取組ついて調べ、自分たちができることや地域の人たちに伝えたいことなど考えたことを防災パンフレットに表す。さらに、防災を日頃から身近に感じてもらうために、それまでの学習から明らかになった「大事にしたい防災・減災への取組」について防災カルタにし、書写の時間を使って作成する。これらの学習を通して、「花は咲く」をどのように歌えばよいか考え練習する。

地域の防災イベントには、企画段階から参加させていただいて、子どもたち自身も地域の一員であるという自覚をもって主体的にイベントに参加・参画できるようにしたい。防災イベントでは、国語科で書いた手紙を展示したり、社会科で作成した防災パンフレットについて展示・発表したりする。また、防災カルタの実演、「花は咲く」の合唱など、学びの成果の発表の場とする。



なお、各教科の学習指導案を次ページ以降に記す。

小学校第６学年　音楽科　学習指導案

音楽教育専修　藤本尋巳

1. 単元名　　震災当時の状況や人々の想いを知り、想いを込めて歌おう

2. 単元の目標

・曲想と音楽の構造や、歌詞の内容や曲が作られた背景との関わりについて理解する。　（知識・技能）
・歌唱表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら、歌詞に込められた想いを聴き手に伝えられるようどのように歌うかについて、思いや意図をもつ。　（思考力、判断力、表現力）
・曲が作られた背景や歌詞の内容と曲想や旋律の動きとの関わりに興味･関心をもって理解しようとし、音楽活動を楽しみながら協働的に歌唱の学習に取り組もうとしている。
（主体的に学習に取り組む態度）

3. 単元について

(1) 教材観

本教材《花は咲く》は、東日本大震災後に復興支援曲として作曲・発表され、幅広い世代の方に馴染みのある曲である。歌詞を読み解くと、震災が起こった季節、震災前の風景を思い出す様子、これからの明るい未来を期待する希望などが思い起こされる。総合的な学習の時間で学んだ災害や防災についての知識と関連させながら、今までの生活とは一変した生活を送らざるをえなくなった被災者の方の気持ちや、学んだことを踏まえてどのような願いを込めてこの曲を歌うかを児童一人ひとりに考えさせ、歌唱表現を深められる教材である。

(2) 児童観

本学級の児童は、小学校に入学して以来、年に数回ある避難訓練にも真剣に参加し、総合的な学習の時間の防災の学習の時間にも主体的に取り組んできた。しかし、自分たちの奈良県で災害が起こり得るという危機感や実感が中々もてずに、防災について学んだことを自分事として捉えられていない部分がある。そこで、本単元の歌唱教材の歌詞の意味や背景について、総合的な学習の時間や他の教科で学んだ防災に関する知識と関連させながら学ぶ中で、災害はいつどこで起こるか分からないということ、災害時に焦らず行動できるようになるためには、日頃からの備えや心構えが大切であり、その積み重ねが自分や大切な人の命を守ることに繋がると意識してもらいたい。また、災害が起こったときには、率先避難者として自ら行動ができるよう、被災された方の体験談や想いを知り、自然のもたらす威力の大きさや日頃の備えの大切さを実感し、防災意識を高めるとともに、歌唱表現を深めていく中で、復興への思いやこれからへの願いをもち、歌唱表現の創意工夫に活かせるようにしていきたい。

(3) 指導観

この曲の歌唱活動を通して、自分なりの願いや想いを込めながら歌うことの良さや大切さを実感してもらいたい。歌詞を部分ごとに区切り、それぞれの歌詞が表すものを考えさせ、旋律の動きや強弱に着目しながらどのように歌いたいかを考えさせる。また、総合的な学習の時間での震災・防災に関

する学びを振り返りながら、いつ起こるか分からない災害の怖さや、被害を最小限に抑えるために日頃から防災意識をもつことの大切さを再確認し、災害・防災について自分事として主体的に考えられるように促していく。また、学習の最後のまとめとして、防災イベント時に《花は咲く》を参加者の前で演奏披露するために、自分たちで表現の仕方を考え、話しあいながら深めていく学習を進めていく。

(4) ESD との関連

・本学習で働かせる ESD の視点(見方、考え方)

相互性

災害はいつ、どこで起こるのか予測不可能であるため、過去の震災時の教訓や防災意識を今生きている人たちで共通認識を図り、受け継いでいくことが大切である。

責任性

誰かに守ってもらう、助けてもらうのではなく、一人ひとりが自分の命を責任もって守り、率先避難者となることが大切である。

・本学習を通して育てたい ESD の資質・能力

長期的思考力

過去の震災時の教訓や防災意識を今生きている人たちで共通認識を図り、受け継いでいきながら、未来の災害に備える

コミュニケーション能力

自分の考えだけでなく、仲間と意見交流しながら自分にはなかった意見にも出会い、多角的に見つめ考えることができる

・本学習で変容を促す ESD の価値観

自然環境・生態系の保全を重視する

災害の学習を通して自然のもつ力の大きさを知り、自然とともに生きていくために必要な視点を養う

・関連する SDGs

4 質の高い教育をみんなに

11 住み続けられるまちづくりを

17 パートナーシップで目標を達成しよう

4. 単元の評価規準

ア.知識・技能	イ. 思考力・判断力・表現力	ウ.主体的に学習に取り組む態度
曲想と音楽の構造や、歌詞の内容や曲が作られた背景との関わりについて理解している。	歌唱表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら、歌詞に込められた想いを聴き手に伝えられるようどのように歌うかについて、思いや意図をもっている。	曲が作られた背景や歌詞の内容と曲想や旋律の動きとの関わりに興味・関心をもって理解しようとし、音楽活動を楽しみながら協働的に歌唱の学習に取り組もうとしている。

5.　単元の指導計画（全４時間）

主な活動	学習への支援（・）	評価（△） 備考（・）
1 歌唱教材《花は咲く》と出会い、歌詞の内容と本曲が作曲された背景を知るとともに、譜面を見ながら歌うことができるようになる。 （1 時間）	・まずは模範唱を聴き、初聴の感想をワークシートに書く。 ・気になった歌詞に印をつける。 ・東日本大震災発生当時に生まれておらず、知らない児童が多数いると予想されるため、動画や写真を交えながら、東日本大震災についての概要を説明する。	△ウ
2. 東日本大震災の被害の状況や人々の想いを知り、歌詞の内容理解を深める。 （1 時間）	・国語科で学んだ、東日本大震災で被災された方々の想いや当時の様子について振り返る。 ・歌詞を部分ごとに区切り、そこに込められた想いを考える。	△ア △イ
3. どのように歌いたいかをみんなで考え、表現を深める。 （1 時間）	・歌詞の内容を知り、考えたことをもとに、どのように歌うのがふさわしいのかをまずは個人で考え、共有し合い、みんなで考える。	△イ、ウ
4. 6 年〇組で心を一つに《花は咲く》を演奏しよう。	・自分たちで考えた表現で歌うことができるよう練習をし、まとまりのある音楽になるよう完成させていく。	△イ、ウ

第６学年　理科学習指導案

文化遺産教育専修　大竹玲央

1. **単元名**　　大地のつくりと災害（火山・地震）

2. **単元の目標**

・大地・地層がどのように形成され、どのような特徴があるのかを理解している。災害が大地にどのような影響を及ぼしているのかを理解している。（知識および技能）

・地層や堆積の様子をみてどのような特徴があるのかを考え、気づくことができる。また噴火や地震による災害の影響を考え、対策・避難方法を考えることができる。地震発生に伴って発生する津波の仕組みを、図などを用いて説明することができる。（思考力・判断力・表現力等）

・大地と災害がどのようにつながっているのかを理解しようとし、それを説明しようとしている。そして災害を他人事とせず、自分たちに起こりうると考え、対策や避難方法を身近な人々に発信することができる。（主体的に学習に取り組む態度）

3. **単元について**

（１） 教材観

本単元では実際に水と土を使用して地層が形成される実験や、災害発生の動画やイメージ動画を教材として取り上げる。

実際に水と土を使用した実験により地層がどのように形成され、どのような特徴があるか確認することができる。この実験により地層形成がイメージしやすくなると考える。また火山灰の堆積についても火山災害のところで取り扱うので、この分野において火山灰が堆積して地層が形成されることに対しても、理解が進みやすくなると考える。

災害発生時の動画やイメージ動画を用いることで大地の動きや防災に対する興味関心を引くことができると考える。災害は規模が非常に大きいものが多いため、イメージがしにくい。しかし実際の動画やイメージ動画を用いることでイメージの補助が期待できる。しかし実際の動画ならば災害に対するトラウマが蘇ることも考えられるので、そういった児童に対する配慮が必要になる。またイメージ動画はあくまでもイメージ動画なので、実際とは異なることがある、ということを児童に示しておくことも求められる。

（２） 児童観

本学級の児童は今まで奈良で暮らしてきたこともあり、大災害を経験した児童は少ない。また奈良市は今まで大きな被害がないから安心と考える児童も少なくない。しかし近年は東日本大震災や能登地震が発生し、南海トラフも近いうちに発生する可能性が高いとされている。南海トラフにより奈良も大きな被害が生じるとされている。また地震災害だけではなく水災害も発生する可能性が高く、防災意識を強く持つ必要が生じている。

防災意識を芽生えさせるだけではなく、大地の変化や災害の仕組みを学ぶことで地学への興味関心も芽生えることが期待できる。

（３） 指導観

単元は地層の形成、火山災害、地震災害、防災に大別する。地層の形成では水と土を使用した実験でどのように地層が形成されるかを確認する。地層の形成・特徴を確認することでどのように大地や

地形が形成されるのかをイメージしやすくする。また地層形成の中で化石が作られることも示す。

火山災害では最初に火山灰の堆積で形成された地層を示す。また噴火が発生した場所と堆積した場所の関係性を示し、火山灰の飛散は広範囲に及ぶことを確認させる。

地震災害では地層が大きく変化している画像を見せる（断層や褶曲など）。地震により大地が大きく変化することがあり、津波や土砂災害が発生することも示す。特に津波の発生は誤解が生じないように、プレートの跳ね上がりで発生することを示さなければならない。また東日本大震災の例を取り上げ、地震災害に伴って原発事故が発生したことも取り上げる。

防災の部分では火山災害や地震災害を例に取り上げながら授業を進める。その中でどのように自分の身を、家族の身を守ればいいのかを示す。火山・地震だけではなく水災害も取りあげる。奈良県でも水災害は発生しうるため、奈良県が発信しているハザードマップを用いながら、どのような避難が必要なのかを考えさせる。

（4）ESD との関連

・本学習で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

公平性

奈良は災害が少ないと考えられているが、さまざまな災害が発生する可能性があるということを把握することが求められる。

連携性

もし、自分たちが住む地域で災害が発生した際、自分の身を守ることが 1 番だが、災害に対する危機意識を身近な人々に喚起することが必要になる。その中で自分だけではなく多くの人々と避難する可能性があるので、協力が求められる。

・本学習を通して育てたい ESD の資質・能力

「未来像を予測して計画を立てる力」

災害が発生する可能性があり、もし発生した場合どのような対応が必要なのかを考え・計画する

「多面的・総合的に考える力」

どのようにして災害が発生するのか、なぜ大規模な災害が発生するのか大地のつながりから考える。

「つながりを尊重する力」

自分たちが住んでいる場所は地層が形成されることで生み出されていることを理解し、災害と地層は切っても切れない関係ということを把握する。

・本学習で変容を促す ESD の価値観

世代内の公正

災害が発生し、避難するときは自分たちだけではなく多くの人々が関わってくる。その中で安心して避難できるようにする。

自然環境・生態系の保全を重視する

自然災害に対する知識や理解を持って、自然が生み出す景観・影響を考えることができる。

・達成が期待される SDGs

4. 質の高い教育をみんなに
11. 住み続けられるまちづくりを
14. 海の豊かさをまもろう

15.　陸の豊かさをまもろう
17.　パートナーシップで目標を達成しよう

4.　単元の評価規準

ア.知識及び技能	イ.思考力・判断力・表現力等	ウ.主体的に学習に取り組む態度
①　どのように地層が形成され、どのような特徴があるのか理解している。 ②　噴火や地震はどのような影響を大地に及ぼしているのか。またどのように発生しているのか理解している。 ③　自分の住む地域に発生する可能性が高い災害を把握し、どのような避難が求められるのか理解している。	①　地層を見て、どのような特徴があるかを気づき、考えている。 ②　なぜ噴火や地震、津波が発生するのかを図などを用いて説明・考えている。 ③　災害が発生する前にどのような対策が必要か、発生してからどのような対応が求められるかを考えている。	①　自分が住んでいる地球を形成している大地を理解しようとしている。また大地がどのように災害に関わっているのかを考えようとしている。 ②　災害を他人事と考えずに、自分の地域でも発生しうると考え、どのような避難・対策が必要なのか考え、身近な人々に教えようとしている。

５. 単元の指導計画（全 2 時間）

次	主な学習内容	学習への支援	評価・備考
1	地層のつくり 地層の画像などを用意し、地層を観察してどのような特徴が見られるか児童に考えさせる。実際に地層を見ることは難しいので代わりにボーリング調査で得ることができた試料も観察に使用する。	地層・ボーリング試料を観察させる際には、どの点に注目して欲しいのかを児童に伝える。特に色や粒径を意識させる。	地層の特徴を画像や試料の観察で気づいている。また画像などを用いて説明できる。（思・判・表）
2	地層形成の実験（水を流して地層を作る） 砂、泥、移植ごて、ビニールシート、樋、水槽、ジョウロ、イスなどを用意し、砂と泥が堆積していく様子を観察する。	前回の地層の画像のようになることを確認させる。またビデオカメラで事前実験の様子を撮影しておき、堆積している様子を実験後に示す。	実験をもとにして地層がどのように形成されるのか考えることができる。(思・判・表)
3	地層の形成 前回の振り返りを行い、砂と泥を混ぜたものはどのように堆積したかを児童に問いかける。	前回の実験の振り返りを行い、砂と泥の層がどのように分離したのかを意識させる。	地層が粒径だけではなく、水の働きで形成されるのを理解している。(知・技)

	砂と泥の層が綺麗に分かれたことを確認させる。また水の働きによりこのような地層が形成されることを示す。	砂と泥が分離するのは、水の作用によるものということを「運搬・堆積・侵食」の振り返りを行いながら示す。	
4	化石 地層形成の仕組みを振り返りながら、化石がどのように誕生するか示す。理科室で管理している化石などを使用し様々な生物が化石になっていることを示す。	初めに化石といえばと児童達に聞き、なぜ生き物が石のように変化するのかと問いかける。 理科室に保存してある化石を実際に提示しながら、化石ができる様子を図で示す。このとき地層が形成されるように、堆積が鍵となることも示す。	化石がどのように形成されるかを理解している。化石の生成を考える際に地層の堆積と合わせて理解している。（知・技）
5	火山による地形の変化 図書館やタブレットを使用して火山活動について調べる。調べたことを簡単にまとめ、グループごとに発表させる。特に火山活動により生じる地形の変化に注目する。	火山による地形の変化や地層の形成などを意識させながら、調べ学習を行わせる。 またこれら以外にも火山に関する文化にも触れてもいいということを説明する。	自分から火山について調べている。（主体的） 火山による地形の変化を理解している。（知・技）
6	火山と火山灰 噴火により火山灰が飛散することを示し、火山灰が積もることでどのような被害が生じるのかを説明する。火山灰の他にも火砕流や火山弾なども噴出することを示す。	前回、調べ学習で噴火の影響で地形が変化することを振り返らせる。 地形の変化の他に、噴火で様々なものが噴出することも説明する。	火山から噴出されるものについて理解している。（知・技） 火山灰が堆積し、地層が形成されることや被害について考えることができる。（思・判・表）
7	地震による大地の変化① 5 時限目と同様に、地震による地形の変化について調べ、まとめグループごとに発表する。	地形が変化するのを、断層が生じていることを軽く触れる。 地震による直接の被害だけではなく、それ以外に生じる可能性がある地形の変化も調べるように指示を出す。	地震により大きく地形が変化することを調べ上げている。（主体的） 地層だけではなく、土砂災害も地震により引き起こされることに気づいている。（思・判・表）
8	地震による大地の変化② 地震により地形が大きく変化	断層が生じた理由にプレー	断層について理解している。

	していることを変化前、変化後の写真を用いて児童たちに示す。また地層がズレている画像も示し、断層について取り扱う。	トが関わっていることを軽く触れる。プレートについては後から詳しく説明する。	（知・技） 地層が大きく変化している様子を地震と絡めて説明できる。（思・判・表）
9	噴火と地震の原因 噴火と地震はプレートの動きが大きく関わってくる。図などを用いて説明するが、簡易的な実験でプレートの動きを示す。特に地震の動きを示すため、下敷きやガラス棒を用いた実験を行う。	下敷きを２枚用意し、実際にプレートが跳ね上がる簡易的な実験を行わせる。またガラス棒の実験はガラス片が危険であるため、教師が行う。安全のため水を張った水槽の中で行うか、事前に録画しておいた映像を使用する。	プレートがどのように動いているのかを理解している。（知・技） 実験により地震の種類を理解している。（知・技）
１０	火山による災害・防災 噴火により生じる被害について取り扱う。	振り返りで児童たちが調べた内容と 6 時限目で取り扱った内容に触れる。 実際に噴火の影響で変化した地形の画像や映像を用意する。（ハワイの溶岩や御嶽山の噴火の様子など）	火山噴出物が及ぼす被害を理解している。（知・技） 火山災害ではどのような防災が必要なのかを考えることができる。（思・判・表）
１１	地震による被害（直下型を中心に） 9 時限目に行ったガラス棒の実験をもう一度行う。直下型地震は断層が両側から力がかかり発生していることを示す。阪神淡路大震災といった地震の映像を用いて、どのような被害が生じるかを考えさせる。	再びガラス棒の実験を行う。9 時限目の内容を振り返りながら、直下型地震の特徴を触れる。 地震の時の様子を画像や映像で示す（阪神淡路大震災を例に取り扱う）。	実験や映像から直下型地震のイメージを掴んでいる。（知・技） 直下型地震で起こりうる被害を考えることができる。（思・判・表）
１２	地震による被害（プレート境界型を中心に） 9 時限目に行った下敷きの実験を行う。プレート境界型地震はプレートがプレートの下に沈み込むことで発生することを示す。また津波が発生する仕組みも示し、津波による被害・防災についても取り扱う。	下敷きの実験を再び行ってもらう。プレートが沈み込む様子をイメージ映像で確認し、東日本大震災を例に津波発生の様子を観察する。11、13 時限目でも地震の映像を流すので、地震に対してトラ	実験や映像からプレート境界型地震の特徴を掴んでいる。（知・技） プレート境界型地震で生じうる被害を考えることができる。 津波の仕組みについてプレ

		ウマがある児童は別室で待機してもらうように指示する。	ートの動きと共に説明できる。（思・判・表）
１３	東日本大震災の避難・防災 2011 年 3 月 11 日に発生した被害日本大震災の映像や画像を取り上げ、どのような被害が生じたかを児童に示す。また地震・津波による被害だけではなく、避難所での生活なども示す。 地震による被害の一つとして福島第一原発・第二原発の事故を取り扱う。原発事故で発生した放射線はどのようなもので、どのような被害を生み出したかを説明する。	振り返りで東日本大震災はプレート境界型地震により発生したことに触れ、被災者のその後や避難状況について触れる。 「津波てんでんこ」などの被災者の話や津波資料館の資料も取り扱う。 福島県では今でも放射線の数値を新聞で掲載しているので、そのような資料を用意する。	東日本大震災で発生した被害について理解している。（知・技） 被災者がどのような避難、避難生活を過ごしたのかを把握している。（知・技） 福島県の原発事故で生じた被害について説明することができる。（思・判・表）
１４	災害考古学 考古学では発掘が多く行われ、発掘の中で過去の災害が明らかになることがある。火山灰の堆積や噴砂など災害の記録が調査で確認される。また発掘も地層の堆積が大きく関わっているため、地層の形成も振り返りながら、内容を取り扱う。	実際の発掘の画像や噴砂などの画像を用意し、視覚的な理解が進むようにする。 地層累重の法則や水平性の法則などがあるが、難解な内容を含むためイメージ図などを使用する。	災害は遥か昔から発生していることを理解している。（知・技） 過去の災害を明らかにする方法は発掘などがあることを理解している。（知・技） なぜ災害が発生したのか、画像や地層の写真で考え・説明ができる。（思・判・表）
１５	まとめ 今までの振り返りとして、地層形成から火山・地震による影響などを取り扱う。授業で取り扱った画像や動画などを用いて振り返りを行う。	今までの授業で用いた画像や動画を使用して、振り返りを行う。 画像や動画だけではなく、振り返りのプリントも用いる。 地層形成の流れを説明できる問いや、地震の違いを説明する問いを用意する。	「大地のつくりと災害」の単元で取り扱った内容を一通り理解している。（知・技） 災害に対してどのように対応すればいいか、考えることができる。（思・判・表）

第６学年　国語科学習指導案

国語教育専修　田中愛花

1. **単元名**　「家族や地域の方に災害・防災について手紙で伝えよう！」

2. **単元の目標**

〇実際に災害が発生した際に先人達は何を思い、どんな行動をしたのかを記録文から読み取り、学んだこと・感じたことをワークシートにまとめるとともに家族や地域の方に手紙を書いて伝えることができる。（知識及び技能）

〇記録文を読んで理解したことに基づいて、防災や震災について考えたことを筋道の通った文章となるように文章全体の構成や展開を考え手紙で伝えることができる。（思考力・判断力・表現力）

〇記録文を書いた人は、災害が起こった時にどのようなことを思い、どんな行動をしたのか興味・関心を持って向き合い、読むこと・書くことを通してさらに理解を深めることができる。（主体的・対話的で深い学び）

3. **単元について**

(1) 教材観

本単元では初めに、震災を経験した方達の記録文を読んだ後、学んだこと・感じたことをワークシートにまとめる。次に、小学四年生で学習した手紙の書き方について復習する。身の回りの人に手紙を書く活動を通して、自分が書きたいことを選び、事柄を整理し、相手意識を持って敬体など丁寧な言葉で書くことができることをねらいとしている。手紙の書き方について復習した後、家族や地域の方に向けた手紙を書いていく。

(2) 児童観

単元を学習する対象児童は、これまで小格好低学年から避難訓練等の活動を行っている。しかし、自分の身に災害が起こるかもしれないという意識を持っている児童は少なく、実際に避難する時には指示を待つ子どもがほとんどで、積極的に動こうとすることはあまりない。本単元では災害について、災害を経験した人々は何を思い、どんな行動をしたのか記録文から学び、自分や家族、地域の方に伝えることで災害や防災について児童自身に考えさせることを活動の主眼としている。また、地域の人々と交流することでこれまで地域で行ってきた防災対策を学ぶとともに、どのように手紙を書けば分かりやすく伝えることができるのか考えられる時間を多く設けたい。

(3) 指導観

本単元の指導にあたっては、災害・防災について自分で学んだこと、考えたことを他人にわかりやすく伝える書き方について特に着目して指導をしていく。小学四年生の時に手紙の書き方については学習しているが、忘れてしまっている児童もいることを配慮して基本的なところから指導する必要があると思われる。手紙の形態で自分の学びや考えを書くことがどうしても難しい児童には、封筒や形式のみ手紙の書き方に沿って書き、学びや考えを書く際は感想文の書き方で書くように指導することで学習の遅れが出ないよう配慮する。

書いた手紙については、家族や地域の方に送るか防災イベントの展示に出すかについて児童本人に決定させる。

(4)ESD との関連

・本単元で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

相互性

家族や地域の人震災・防災について学んだことや感じたことを伝える経験を通して、自分は人と繋がっていること、いざという時には助け合う必要があることを感じられるということ。

責任性

災害に実際にあった人の話を読むことによって、災害の実態を知り、身近に災害が起こった時のことを考え日頃から防災意識を持てるようになること。

・本単元を通して育てたい ESD の資質・能力

他者と協力する態度

自分の命や行動だけでなく、地域の人々の防災力を高めたり、助け合ったりすることができる

進んで参加する態度

意欲的に災害・防災について学ぶことで、防災力の高い地域づくりに貢献することができる

・本単元で育てたい ESD の価値観

世代間の公正を意識できる

災害にあった先人が、災害時に何を感じどのような行動をしたのか学習することで、自分の身に災害が起きたときに何をすればよいかあらかじめ考えることができ、正しい判断を下せる人が増えるから。

世代内の公正を意識できる

家族や地域の人に災害や防災について伝える活動をすることで、自分は人と繋がっていること、いざという時には助け合う必要があることを感じ共に避難しようという意識が芽生えるから。

・達成に貢献すると思われる SDGs

4　質の高い教育をみんなに

11　住み続けられるまちづくりを

4　単元の評価規準

ア知識・技能	イ思考・判断・表現	ウ主体的に学習に取り組む態度
①実際に災害が発生した際に先人達は何を思い、どんな行動をしたのかを記録文から読み取り、学んだこと・感じたことをワークシートにまとめている。 ②家族や地域の方に手紙を書いて伝えている。	①記録文を読んで理解したことに基づいて、防災や震災について考えている。 ②筋道の通った文章となるように文章全体の構成や展開を考え手紙で伝えている。	①記録文を書いた人は、災害が起こった時にどのようなことを思い、どんな行動をしたのか興味・関心を持って向きあっている。 ②読むこと・書くことを通してさらに災害・防災についての理解を深めている。

５．単元の指導計画（全４時間）

次	主な学習活動	学習への支援	評価（△） 備考（・）
1	○単元の見通しを持つ 東日本大震災津波伝承館やその他の地震に関する博物館においてある被災された方が書いた記録文を読み、感じたことや知ったことをまとめ、家族や地域の方に向けて手紙を書く ○記録文を読み進める	・児童が記録文を読んで震災や防災について学んだことを、家族や地域の方に手紙で知らせることで地域の防災意識が高められることを伝える。 ○児童に提示する記録文を 10 用意する。	ウ①
2	○記録文を読み進める（続き） ○心に残ったエピソードや言葉をワークシートに書く ・「津波てんでんこ」という言葉があるのだな。 ・みんなで辛い震災の記憶を乗り越えようとしているのだな。	○記録文には方言や難しい言葉が出てくることがあるので、各々で辞書やインターネットを使って調べるように伝える。 ○記録文を書いた方の気持ちに寄り添いながら、読み進めるよう伝える。 ・自分がもしこの状況になったら、どうする？	ア① イ① ウ②
3	○手紙の書き方について学ぶ a)手紙を書いた経験について話し合い、提示した手紙の全文を読み手紙の書き方の特徴的なところを見つける b)実際に簡単な例文を使って手紙を書き、手紙の書き方を実践する	○手紙分の中で書きかたが特徴的だと思ったところに線を引くなどして、手紙の書き方を習得できるよう促す。 ○発見したことや学んだことを児童同士で共有する時間を設ける	ア② イ②
4	○記録文を読んで学んだこと、考えたことを家族や地域の方に向けて手紙を書く ・「津波てんでんこ」という言葉を初めて知った。震災が起きた時は、真っ先に自分の身を守る行動をしてほしい。 ・辛い経験から、新たな絆が生まれることもある。	○自分が感じたありのままを書いて良いと伝える。 ○学習の遅れをとっていると感じた児童には、封筒や形式のみ手紙の書き方に沿って書き、学びや考えを書く際は感想文の書き方で書くように指導する。	ア② ウ①
5	○防災イベントの展示か家族や地域の人に手紙を送るかのどちらかを選ぶ ・防災イベントの展示に出す 展示に出す作業を行う ・家族や地域の人に手紙を送る 手紙を送る作業を行う	○防災イベントの展示か家族や地域の人に手紙を送るかのどちらかを児童の意思で決めさせる	総合として

第６学年 社会科・総合的な学習の時間 学習指導案

文化遺産教育専修　村島　大賀

１．単元名　　「防災パンフレットを作ろう！～防災に関する学びを地域に発信しよう～」

２．単元の目標

（１）災害が発生した際にどのように行動する必要があるのか、発生時・発生前で必要な行動を理解するとともに、様々な情報をより多くの人々にパンフレットにまとめて伝達することができる。

（知識及び技能）

（２）これまで日本各地で起きた自然災害に目を向け、自分達の地域とどのような相違点・類似点があるのか客観的に評価した上で、自分達の地域に求められる防災への取り組みやその意識づくりについて、自分達の考えを表現することができている。　（思考力・判断力・表現力等）

（３）「どこかで起きている」ではなく「いつか起こる」といった防災に対する強い意識や姿勢を持つとともに、積極的に地域の人々と交流することで、自分達の地域についての認識を相互に伝達することができている。　（主体的に学習に取り組む態度）

３．単元について

（１）教材観

本単元では、自然災害に関する認識や意識をこれまで日本で起こった自然災害の歴史から学ぶことによって、人々はどのようにして災害と向き合ってきたのかについて考え、実際に災害が発生した際に率先避難者として積極的に行動することができることを目的として、学習を進めていく。そしてその知識や経験を防災パンフレットという形で地域の人々に発信していくことを最終的な目標とした。奈良という地域は周囲を各都道府県で囲まれているため、地震や津波などの自然災害に対しての意識が他の都道府県と比較して、低い傾向にあると考えられる。そのため日本各地の災害からのみの領域で絞ってしまうと、児童の意識に結び付きにくいのではないかと考えられる。

日本各地で起きた自然災害やその実情について目を向けた上で、自分達の地域ではどのような防災対策を実施し、そしてこれからどのような防災意識を持っていく必要があるのかについて、地域の人々や専門的な機関等と交流・相談しながら、パンフレットという情報媒体を用いて児童自身の知識・考え・経験から相手に伝える手段や方法を経験する。

（２）児童観

本単元を学習する対象児童は、これまで避難訓練等の活動を小学校低学年から一貫して行っており、自然災害に関する話を学活などの授業で耳にしたことがある。しかしながら「自分達が災害にあうかもしれない」という意識を持っている児童は少なく、実際に避難する時には大人である先生の指示を待ち、積極的に動こうとすることは珍しい。本単元では自然災害について、歴史的な側面から学習した上で、自分達の地域との関連について児童自身に考えさせることを活動の主眼としている。また地域の人々と交流することでこれまで地域で行ってきた防災対策を学ぶとともに、様々

な人々から獲得した情報をどのようにすれば分かりやすく発信することができるのか、地域との交流だけでなく情報発信についても学習・経験できるようにしていきたい。

（３）指導観

本単元での指導にあたっては、日本各地の自然災害に関する事象を入り口に、自分達の地域ではどのような災害が起こり、どのようにして防災対策を行ってきたのかという点を題材として扱っていく。まず日本各地で発生した主要な自然災害（東日本大震災や阪神淡路大震災など）について歴史的な側面から学習を行う。そして自分達の地域である奈良と各地での災害について、起こる災害やそれに対する防災対策には様々なものがあることを認知する。そこから自分達の地域ではどのような自然災害が起こる可能性があるのか、または過去に起きたのかという課題を掴ませる。

次に自分達の地域で起こった災害について歴史的な側面を学習する。ここでは専門的な機関（博物館や伝承館など）の施設や災害に関する教訓碑へ赴き、奈良という地域の特性を理解することから始める。そして現地の人々はどのようにして災害対策を行ってきたのかについて、地域の人々とコミュニケーションを取ったり、自分達で調査を行ったりすることによって、防災に対する認識を獲得していく。

そして上記の活動を通して学んだ知識や経験をパンフレットという形でまとめあげ、どのようにして相手に正確な情報を伝達することができるのか模索し、相互に児童同士でも交流させることによって、自分の考えを表現する手段やスキルを向上させる。

（４）ＥＳＤとの関連

・<u>本学習で働かせるＥＳＤの視点（見方・考え方）</u>

公平性…防災に関する知識を知っているだけでは、より多くの人々に防災への意識を共有することができない。自分の考えや知識を相手に伝える必要があるということ。

連携性…自分達だけが防災への知識を高めるだけでは、地域全体の防災力向上につながらない。相互に交流や関連し合っていくことでより大きな輪で防災への意識を共有することができるということ。

責任性…実際の災害で大人がいてくれるとは限らない。自分自身が積極的に率先避難者になることで１つでも多くの命を守ることにつながるということ。

・<u>本学習で育てたいＥＳＤの資質・能力</u>

未来像を予測して計画を立てる力

これまで過去に自分達の地域で発生した災害などについて学習した上で、今後自分達が取るべき防災対策について、地域の一員として何ができるのか思案し計画する。

他者と協力する態度

児童同士で防災についての意識を共有･議論するとともに、地域全体で防災意識を高めるため、積極的に地域の人々と交流しながら防災対策に取り組んでいる。

進んで参加する態度

児童自らが防災に関する正しい認識を持つとともに、意欲的に防災活動に参加することで防災

力の高い地域づくり、すなわち率先避難者が多い地域づくりに貢献することができる。

・**本学習で変容を促すＥＳＤの価値観**

世代間の公正を意識できる

自分達だけではなく、大人や高齢者・小さな子ども達など、同じ地域を共有する人々が震災に対して強い防災力への認識を持ち、助け合っていくことが大切である。

幸福感に敏感になる

震災に強いまちづくりを協力して進めることによって、積極的な率先避難者を増やすことにつながり、震災での被害を最小限に抑えることができる。

・**達成が期待されるＳＤＧｓ**

４　質の高い教育をみんなに

１１　住み続けられるまちづくりを

１７　パートナーシップで目標を達成しよう

４．単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①災害が発生した際にどのように行動する必要があるのか、発生時・発生前で必要な行動を理解している。 ②様々な人から得た情報や自分達が調べたりした学びを相手に分かりやすく伝達する方法（図やイラストなど）を活用することができている。	①地域の過去の自然災害について資料や伝承から認識し、自分達の地域における災害について考えることができる。 ②防災に関する知識を用いて、自分達の地域に求められる防災への取り組みやその意識づくりについて、考えをまとめることができる。	①地域全体での防災力を向上させるという意識を持ち、積極的に地域の人々と交流しようとしている。 ②「どこかで起きている」ではなく、「いつか起こる」という防災に向けた意識を持ち、活動に取り組んでいる。 ③防災について、地域に求められる姿勢や活動について、地域の人々や他地域の人々にも分かるように情報発信しようとしている。

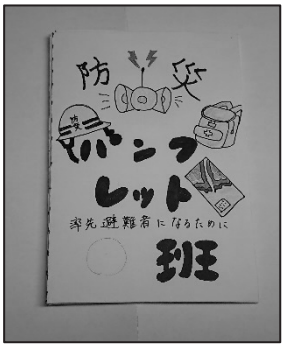
５．単元の指導計画（全２１時間）　社：社会科（６時間）　総：総合的な学習の時間（１５時間）

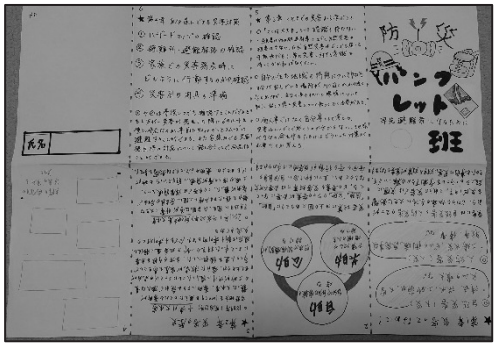
次	主な学習活動	学習への支援（・）	評価（□） 備考（・）
1 社	○日本各地で起こっている自然災害から、自分達の地域における災害と関連させながら今後の活動の課題を見つける。 ・奈良は海なし県だから津波はないかな。 ・地震は奈良県でも起こるよね。どうしたら安全に避難できるのかな。	・日本各地で起こっている自然災害について認識し、奈良と各地の災害やその対策についての類似点や相似点などを児童と意見を交わしながら、学習させる。そして今防災学習を行う意義についても理解させる。	□イ② （思判表）

	・奈良県内でも山がある地域と平らな地域では避難の方法が違うんじゃないかな。		
2 ｜ 3 社	○日本各地における災害について学習し、その後奈良における災害やそれに対する防災対策についても学習する。 ・震災になるとこんなことになるんだ。 ・どうやって逃げるのが良いのかな。 ・避難経路を事前に知っておけば、被害に遭わずに済むと思う。 ・地域によって防災訓練の内容は少しずつ違う。	・実際の災害ビデオを通して、なぜ防災対策が必要になってくるのか考えさせる。 ・奈良における災害について触れ、自分達の周りでも同じような災害が起こる可能性があることを認識させる。	□イ① (思判表) □ウ② (主体的)
4 ｜ 6 社	○実際に奈良の災害に関する施設や伝承館に訪れ、学びを深める。 ・この地域では大きな水害が過去に起こっていたのか。	・地元の案内ガイドの方にお願いし、児童に質問を投げかけるように指示する。なお前次の授業で質問項目は考えさせる。	□イ① (思判表) □ウ② (主体的)
7 ｜ 10 総	○グループに分かれ、自分達で目標・調査計画を練り、調査活動を進める。 ・実際に人の話や専門家の話を聞きたいな。	・グループは普段から共にいる活動班に設定し、調査の方向性や目標が定まるように援助する。 ・児童が調査において人の話を聞きたい場合には、前次の活動でお世話になった伝承館や施設の方を紹介し、それ以外には各地域の役場などの該当する課への面談を提案し、児童と話をしながら調査に関する援助を行う。	□イ① (思判表) □ウ① (主体的)
11 総	○これまでの調査成果を中間報告会という形で発表する。 ・地域ごとに災害などに備えた防災訓練や教訓を活かした知識が育まれている。	・各グループの発表に対して質問を投げかけ、児童同士でも意見交流をさせる。 ・中間報告会ではこれまで自分達が調査した成果・今後の展望について簡単なスライド資料を用いて全体に提示し、ワークシートを通して相互評価を図る。	□ア② (知・技) □イ① (思判表) □イ② (思判表)
12 ｜ 13	○中間発表会を経てさらに必要と考えられる部分を調査する。 ・避難する時には何が必要になってくる	・各班のどのようなところをより伸ばすべきか、必要に応じて支援・援助する。	□ア① (知・技) □イ①

総	のかな。実際に持ってみるとどうだろう。	・前次の学習から得られた意見を基に、各グループの課題点や改善すべき点について指導者から話を伺い、状況に応じて助言を行う。	（思判表） □ウ① （主体的）
14 ｜ 17 総	○これまでの学習を通して得た学びを基にパンフレットを作成する。 ・災害が起きた時にまず何をするのかについて大きく書いた方が良いかも。	・パンフレットを作成する上でどのような情報が求められるのか、何を自分達は他者に伝えたいのかを考えさせる。 ・14限目にてパンフレットの様式や書き方について述べ、16限目当たりで指導者による例示によって、パンフレットに対する具体性や参考になる点を生徒に対して示す。	□ア② （知・技） □イ② （思判表）
18 ｜ 20 総	○パンフレットの内容を発表するとともに、調査の成果を地域の人々に向けて発信する。 ・自分達は大丈夫と思わずに、常に災害に対する対策と危機感を持つことを伝えたい。	・単に発表することで終わりではなく、地域の方々と触れ合う機会を作り交流するようにさせる。 ・パンフレットの内容について、各グループのブースにてパンフレットの内容について発表を行い、資料を閲覧する地域の方や他学年の生徒に対して随時説明を行うように指示する。	□ウ① （主体的） □ウ② （主体的）
21 総	○これまでの学習を振り返り、自分の考えをまとめる。 ・自分の命を守るためにはまず避難すること、そしてその行動の輪を広げていくことが大切。	・今回の学習を通して、自分は災害に対してどのように向き合い、どうなっていきたいのか自分の考えを表現させる。	□ア① （知・技） □イ② （思判表）

以下に 16 限目で指導者から提示するパンフレット例を示す。





※右図は B4 で作成

11 限目で児童が用いる相互評価のワークシートを示す。

中間発表会見直しカード

中間発表会の見直し

名前

発表した班 班	① 調べたこと、わかったこと、感想の区別はできていましたか？ ＋……＋……＋ よい　ふつう　もう少し
感想	② 話し方(声の大きさやスピード)はどうでしたか？ ＋……＋……＋ よい　ふつう　もう少し ③ 聞き手の方を見ながら話せていましたか？ ＋……＋……＋ よい　ふつう　もう少し ④ 今後の見通しはしっかりと立てられていましたか？ ＋……＋……＋ よい　ふつう　もう少し

発表した班 班	① 調べたこと、わかったこと、感想の区別はできていましたか？ ＋……＋……＋ よい　ふつう　もう少し
感想	② 話し方(声の大きさやスピード)はどうでしたか？ ＋……＋……＋ よい　ふつう　もう少し ③ 聞き手の方を見ながら話せていましたか？ ＋……＋……＋ よい　ふつう　もう少し ④ 今後の見通しはしっかりと立てられていましたか？ ＋……＋……＋ よい　ふつう　もう少し

発表した班 班	① 調べたこと、わかったこと、感想の区別はできていましたか？ ＋……＋……＋ よい　ふつう　もう少し
感想	② 話し方(声の大きさやスピード)はどうでしたか？ ＋……＋……＋ よい　ふつう　もう少し ③ 聞き手の方を見ながら話せていましたか？ ＋……＋……＋ よい　ふつう　もう少し ④ 今後の見通しはしっかりと立てられていましたか？ ＋……＋……＋ よい　ふつう　もう少し

第６学年　国語(書写)科　学習指導案

書道教育専修　櫻木　友渚

１．単元名　　「防災カルタを作ろう！」

２．単元の目標

○避難上での留意点、日常的な備えなど、防災上の知識について理解し、誰でもわかりやすい防災カルタを作成することができる。　（知識及び技能）

○これまでの学習を通じて得た知識から、地域の特色を取り入れた防災カルタを作成することができる。　（思考力・判断力・表現力等）

○地域の安全や防災力向上に向けて、地域住民に学習の成果を主体的に発信することができる。（主体的に学習に取り組む態度）

３．単元について

（１）教材観

本単元では、防災学習の成果発表の一環として防災カルタを教材として取り上げる。総合的な学習の時間や各教科での防災学習を振り返り、地域の防災イベントでこれまでの学習の成果をどのように発表するか考えさせることで、児童の自主性を高めることができる。

また、実際に様々な市町村や団体で発表されている防災カルタを体験することにより、これからの防災カルタ作成に具体性をもたせることが期待できる。さらには、防災イベントで防災カルタを用いて地域住民との交流を行うことにより、人とのつながりの心地よさを感じ、コミュニケーションのスキル向上を図ることができる。

（２）児童観

本単元を学習する対象児童は、これまで避難訓練等の活動を小学校低学年から一貫して行っており、自然災害に関する話を学活などの授業で耳にしたことがある。しかしながら「自分達が災害にあうかもしれない」という意識を持っている児童は少なく、実際に避難する時には大人である先生の指示を待ち、積極的に動こうとすることは珍しい。しかし、これまでの防災学習を通じて、率先避難者としての立ち振る舞いを学びつつある。

国語(書写)科では、自分が思うような字になるまで書き続ける児童と、そうではない児童の差が大きい。字を書くことに対して消極的な児童の文字を書く姿勢や丁寧さに関しては課題が見られる。

（３）指導観

本単元の指導にあたっては、まずこれまでの総合的な学習の時間や各教科での防災学習を振り返り、地域の防災イベントでこれまでの学習の成果をどのように発表するかを問いかける。このことを通じて、防災について学ぶだけではなく、学習の成果を発信する重要性について気付かせる。

次に、実際に様々な市町村や団体で発表されている防災カルタを体験することで、カルタ作成に具体性と意欲をもたせたい。なお、カルタを作成する際は、地域のオリジナル性(方言や実際の避難場所等)を取り入れさせる。また、年齢や世代問わず内容が理解できるデザインの工夫について配慮を促すよう

にする。

そして完成した防災カルタを用いて地域住民と交流を行う際には、児童自身が作成した防災カルタの文言について説明や解説ができるようにする。

さらには、これらの活動を通して、地域社会の一員として地域の防災力向上に貢献できたかということを振り返らせ、さらに今後どのような地域の防災力向上の活動ができるか話し合わせることを通じて、これからの活動につなげていくようにする。

（４）ESD との関連

・本学習で働かせる ESD の視点（考え方・見方）

連携性…これからのまちは、地域住民一人ひとりが防災力を高め、地域を支えていく姿勢が必要であるということ。

公平性…より多くの人々に防災の意識を共有するために、自分の考えや知識を相手に伝える必要があるということ。

責任性…自分自身が積極的に率先避難者になることで多くの命を守ることにつながるということ。

・本学習を通じて育てたい ESD の資質・能力

多面的・総合的に考える力

年齢や世代を問わず内容が理解できる防災カルタのデザインを工夫する。

コミュニケーションを行う力

地域住民の防災力が向上するように、防災カルタを通じて地域住民と交流を行い、学習の成果の発信を行う。

つながりを尊重する態度

地域住民とのかかわりを通じて、人と人とのつながりが地域の安全や防災力向上につながることを自覚し、尊重しようとする。

進んで参加する態度

地域の安全力や防災力向上に向けて、地域社会の一員として自分たちにできることはないかと考え、意識的に地域と関わりをもって、地域社会に貢献しようとする。

・本学習で変容を促す ESD の価値観

世代間の公正

自分たちだけではなく、地域住民全体で災害に対して強い防災力への認識を持ち、助け合っていくことが大切である。

・達成が期待される SDGs

４　質の高い教育をみんなに

１１　住み続けられるまちづくりを

４．単元の評価規準

ア　知識及び技能	イ　思考・判断・表現力等	ウ　主体的に学習に取り組む態度
①災害発生時の避難上の留意点、日常的な備えなど防災上の知識について理解している。 ②学んだり、調べたりして獲得した知識を、言葉や図、絵を用いてそれらを関連付けながらまとめる技能を身に付けている。	①地域の一員として、地域の安全や防災力を向上するための方策を考えている。 ②学んだり、調べたりして獲得した知識を、言葉や図、絵を用いて誰にとってもわかりやすく伝える技能を身に付けている。	①地域の防災力を向上させたいという目的意識をもち、意欲的に地域住民と関わろうとしている。 ②防災カルタを通じて、地域住民とコミュニケーションをとりながら、学んだことを適切に発信しようとしている。

５．単元の指導計画（全９時間）

次	学習活動	学習への支援	評価・備考
1	地域の防災イベントの開催に向けて、今後の活動の見通しをつかむ。 ・どうすれば地域の人に自分たちが学んだことを伝えることができるだろう。 ・楽しく防災について学ぶことができたらなあ。	○これまでの防災学習を振り返るとともに、これまでの学習の意義と最終的な到達点について改めて考えさせる。	ア①（知・技） イ①（思判表）
2	防災カルタについて知り、実際に防災カルタで遊んでみる。 ・様々な市町村や団体が防災カルタを作って、推奨しているね。 ・カルタ形式だと分かりやすいし、おもしろい。 ・ゲーム感覚で大切なことを覚えることができた。	○実際に防災カルタを体験することで、今後の活動イメージ(防災カルタの作成)を膨らませやすくする。	ア①（知・技）

3―5	防災カルタを作成する。 ・見やすいように大きな文字で、丁寧に書こう。 ・どんな人でも楽しく学べるような工夫が必要だ。	○絵札は指定の絵柄の札を用意し、文言を考えさせる。 ○地域のオリジナル性(方言や実際の避難場所等)が表現された防災カルタになるよう、指導する。 ○実際に体験してもらう地域の人には様々な世代の人が含まれているという相手意識を持たせる。	ア①②(知・技) イ①②（思判表）
6－8	地域の防災イベントで地域の人に発表・実演を行う。	○積極的に地域住民と関わることができるよう、声掛けを行う。	ウ①②（主体的）
9	活動の振り返りをする。 ・地域の人が楽しみながら、この地域の防災について学んでくれた。 ・防災カルタ以外の防災ゲームを作ってみたい。	○今後の活動へと連続発展させていくために、児童自身が今回の良かった点と反省点について整理できるようにする。	ウ①（主体的）

○カルタ作成例

令和５年度　奈良教育大学
陸前高田市文化遺産調査報告書

令和 6 年 3 月 31 日

国立大学法人奈良国立大学機構奈良教育大学
ESD・SDGs センター
〒630-8528　奈良市高畑町
TEL 0742-27-9367・FAX 0742-27-9147（教育研究支援課）